

Entre les soussignés:

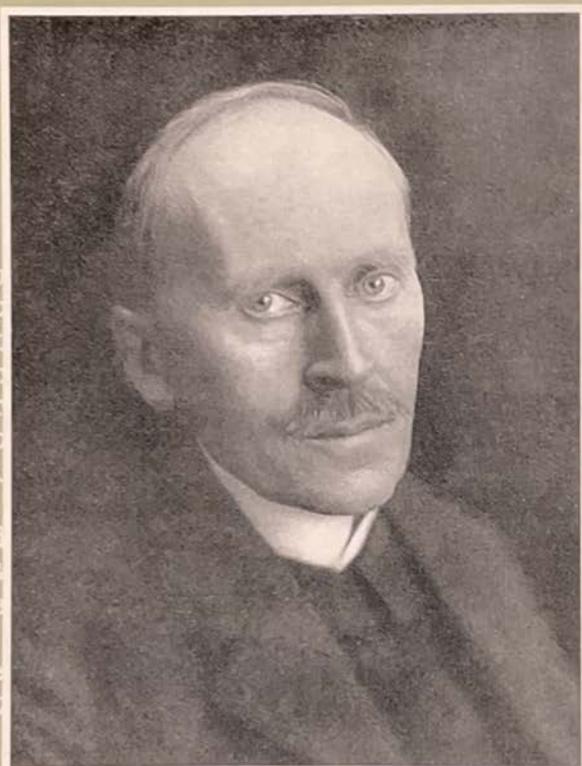


Monsieur Robert Esménard, Editeur, EDITORIAL MICHÉL, 22, rue Huyghens, Paris 14^e, agit en son nom personnel ou au nom de Madame Romain-Rolland, Légataire Universelle de ROLAND, ci-dessous appelé "LE PROPRIÉTAIRE"

ユニテ 28

et Monsieur Toshito OBI, Editeur, 22, Chikicho Bunkyo-ku, TOKYO (Japon) ci-dessous appelé "L'ÉDITEUR"

il a été convenu et arrêté ce qui suit:



cède à l'Éditeur le droit de publier en langue française, les œuvres de ROLAND, à partir du 3 du présent mois.

Les conditions financières sont les suivantes:
- 10 % du prix de vente net, calculé sur les exemplaires vendus;
- 12 % du prix de vente net, calculé sur les exemplaires non vendus;
- 15 % du prix de vente net, calculé sur tous les exemplaires.

Les droits de traduction sont attribués par priorité à une personne désignée ci-dessus, et, à défaut, à l'Association des Amis de Romain Rolland, pour les traductions internationales. Les droits de ces sommes n'ont pas été payés et n'ont pas été entrés en compte.

Art.2.- La répartition des droits est la suivante:
- 10 % du prix de vente net, premier tirage;
- 12 % du prix de vente net, tirages ultérieurs;
- 15 % du prix de vente net, tirages ultérieurs.

L'Éditeur devra verser à l'Association des Amis de Romain Rolland, à Tokyo les sommes ci-dessus, dans les deux mois qui suivent la parution de l'ouvrage, pour les traductions internationales. Il est entendu que ces sommes ne seront payées qu'après l'approbation du Propriétaire de l'œuvre en session.

Art.3.- Le chiffre de tirage de chacune de ces œuvres sera déterminé par le Propriétaire en accord avec l'Association Japonaise des Amis de Romain Rolland.

Art.4.- L'Éditeur devra faire traduire par un traducteur de son choix, et à ses frais, les œuvres de ROLAND en japonais. Le choix du traducteur et la date de la traduction devront être soumis à l'approbation de l'Éditeur à l'Association Japonaise des Amis de Romain Rolland.

Art.5.- Le Propriétaire fournira à l'Éditeur pour la publication les textes originaux des dits ouvrages.

財団法人「ロマン・ロラン」研究所

2001.4

演公念記年十六辰誕ンラーロンマロ

(てま日六廿りよ日廿月一年五十五大)

(演開時六夕毎)

ロマン・ロオランに関する講演

ロマン・ロオラン作 片山敏彦氏譯

『愛と死との戯れ』

一 幕

講 者

千原和雄 高村光太郎
 本間久雄 内藤正徳
 小山久蔵 山田松正
 尾崎嘉八 新田珠樹
 片山敏彦 新田和樹
 以上連日二名宛交代講演
 (取ハロイ)

場所 巴里のジエロオム・ド・クウルツ
 アジェの家

時 一千九百九十四年三月末

配 役

ジエロオム・ド・クウルツ アジェ

(革命議員、六十歳) 沙 見 洋

ソフィ・ド・クウルツ アジェ

(その妻、三十五才) 山本安英

クロロド・ザレエ

(シロンド黨議員、三十才) 瀧 澤 修

ラザア・カノオ (公安維持委員、)

(四十才) 薄 田 研 二

ドニ・ベイロオ (六十五才)

丸 山 定 夫

オラス・ブシエ (二十五才)

伊 達 信

ロド井スカ・セリジエ (廿五才)

細川知歌子

クロリス・ド・ミイ (十七才)

伏見直江

クラブアル保安委員代表者 小杉義男
 家宅捜索者一(テイモレオン) 生方賢郎

同 二(ツラン) 島田敬一

同 三(ボムダアム) 松岡肇子

同 IV(オフタ) 洪 海 泉

同 五(ワシヤアル) 上田清二郎

同 六 小松 功

この袖武装したる兵士數名

舞臺装置 吉 田 謙 吉

舞臺効果 和 田 精

舞臺配光 築地小劇場電氣部

出助手 隆 松 秋 彦

演出 土 方 與 志



『愛と死との戯れ』(築地小劇場)

演出：土方与志、出演：左より丸山定夫のドニ、山本安英のソフィ、細川知歌子のロドイスカ、伏見直江のクロリス、伊達信のオラス。

表紙 ロマン・ロラン

背景のフランス文字は、「ロマン・ロラン全集」(みすず書房) 1947. 5.12付のAlbin Michelとの契約書の第一頁から。本文 p. 23参照。

目次

ロマン・ロランと日本	………	佐々木 斐夫	………	1
「ロマン・ロラン全集」の出発の頃	………	小尾 俊人	………	12
——敗戦、占領、著作権、そして読者——				
ロマン・ロラン『最後の扉の敷居で』から	2	村上 光彦	………	34
ブルゴーニュの小さな村で				
ロマン・ロランのお墓を訪ねて	………	佐久間 啓子	………	55
ロマン・ロラン研究所と自然破壊 (続)	………			57
研究所だより				
ロマン・ロランの日記が解禁	………			67

ロマン・ロラン 研究所の活動・役員改選・設立趣意書	69
二〇〇〇年度 賛助会員、寄付者名簿	74
あとがき	75

ロマン・ロランと日本

佐々木 斐 夫

I

Barbara Hamill Sato 夫人のお話は、いろいろな事情のためお伺いすることができなくなりました。その代り、推薦者であった私が、責任上お話いたすことになりました。バーバラさんは、《日本女性史》の専門家で居られ、ロランの作品との関連で珍しい角度からのお話が聞けると考えておりましたので、まことに残念です。……しかも二、三の理事の方々から、表題のような演目の指定を承り、少し困惑しております。なぜなら多くの方は亡くなられましたが、それでも私にまさる適任者が、ほかに居られるからです。しかし急遽の場合間に合いませんので、私がお役を引き受けることにいたしました。どうか諸事お赦しただきたいと思いません。

ところで日本におけるロランの受容は、当研究所の設立にともない、初めて組織的に実質化されたと思っておりません。別にものものしい申し上げようではなく、広い範囲で、めいめいのロラン愛好者の読書や彼への傾情のつながりに、一つの焦点（あるいは結節点）が生まれたという意味からの発言です。そしてこれに先行して、この研究所の母胎となった日本におけるロラン友の会の設置とその事業の一応の実践は、邦訳ロマン・ロラン全集（全四三巻）の刊行に集約されていると言っても過言ではないでしょう。これらの業績の体現者は、まずすべて日本における数々のロラン愛好者の人々自身であります。事業としての面を中心とした方をとりあえず少数にしばれば、まず片山敏

彦（友の会）、宮本正清（研究所）、小尾俊人（邦訳全集を出版した「みすず書房」）の三人の名が挙げられる、と一往申し上げてよいでしょう。

しかしこれらひとつらなりの出来事も、関わり濃い故人や現存の人などたくさん関係者の賛意と支持なくしては実現されなかったでしょう。ですから本当は現在にいたるまで、ロランとなんらかの接触をもった人々の所在を総点検しその人々の成果を顕揚しなければならないのですが、その作業は多大な時間を必要としますので、ここでは僅かな例証だけにとどめて、網羅的な作業は後来の世代の研究を待つかありません。したがって私の今の任務はその手付けを打つだけにとどまります。

ところで私はその交流の過程を四つの段階に仕切ってお話してみたいと思います。その手始めの第一段階は、私たちの総合的な試みに先き立って散見されるロラン自身との個人的な相互接触の経過であり、私たちは自分たちの自主的な協力を重視して、自恃の念から、友の会成立以前を一括してとらえ、その段階をあえて先史（prehistoire）と稱ばしていただきたいと思えます。

このことは、まずロラン自身の側について見れば、彼が特に劇作に興味を寄せていた時代で、ほぼ一九世紀の後葉から二〇世紀の初頭、つまり彼の青年期から壮年期へ移る、そして彼の文学と思想のほぼ成熟期に当たります。つまり彼の文芸制作へのマグナが、作品（ことに民衆劇）の成立（表現）への情熱を沸々と湧きたぎらせていた時期であります。それらの試作は多く未完で終りましたが、後、一九二〇—三〇年代にかけて、まとまりある作品として結実しました。これらの能作に続く二〇世紀初頭には、続いて「ジャン・クリストフ」が着手され、そして徐々に形を成していきました。

これに対応して日本では、いわば大正期の啓蒙人たちが民主主義への理解を深め、日本の思想の西欧化に意義を開発し、それゆえ文芸面では、フランスのこの新鋭な作家への関心がおもむろに熟し始めていました。

以下に私は彼の思想や文筆成作への反応をほんの僅かしか、記しとどめることしかできません。しかしこの時期にロランは単なる文芸作家としてだけでなく、すでに社会と芸術とにおける——実践的な意味をもち、西欧思想の心髓を体现する——行動的な文学者として認容され始めていました。ただしその受容の仕方はばらばらで、日本人にとつては各種の世界で、自己の専門作業の唱導者ないし教示者として扱われていた、とでも言えましょう。

今世紀における初期に限って幾つか例示してみますと、高村光太郎が、二つの雑誌（『太陽』と『生活』）にドビュッシー（一九一一）および『ジャン・クリストフ』第四巻の訳文（一九一三、後者は抄訳）を掲げ、ミケランジェロの彼是かれこゝについて中川臨川、長与善郎（一九一五「白樺」）、木村荘太（洛陽堂）などが訳出しています。ついで尾崎喜八がベルリオーズ、R・シュトラウス、ドビュッシー、グレットリ（一九一六、「白樺」）を訳載しており、さらに一九一七年から一九一八年にかけては豊島与志雄の『ジャン・クリストフ』の第一巻から第六巻までの翻訳が出版されるにいたりました。以後、第二次大戦の終末にいたるまでに宮本正清の『魅せられたる魂』の大部分と、新城和一・大沢章・片山敏彦・高橋邦太郎・小川泰三などによる演劇作品、高田博厚、大田黒元雄・新庄嘉章などの音楽論、そしてインド研究や半ば政治的な実践記録まで訳出紹介されるにいたりています。そして特筆されるべきことは、阿部次郎が『三太郎の日記』に、その記述に添い鈔訳した種々の付加文章のうちに、H・ヴォルフ、トルストイ、ルソーなどのロランの詞章の一部を編入していることです。それらの訳文は、すでに『学芸論鈔』の書名で一九一三年改造社から版行された本のうちに収録されています。

ただしこれらの人々のロラン紹介は、むしろ自分らの好む道を進んでゆく途次にふと遭遇して、自己のテーマに即

する感銘を受けた原著者の関連発言を、自らの仕事の助けとしたという事情を思い合わせなければなりませんまい。けれども宮本・片山・尾崎・上田秋夫・木村荘八・成瀬正一などのように、ロランの原著を読んで受けた大きな感銘からの紹介という、ロランへの直接じかの遭遇を機縁とする傾向も生じていたのです。

III

むしろこのような巨きな流向に即して、日本の精神界へのロランの影響は発動し始めたとしても過言ではないでしょう。わが国におけるロマン・ロラン友の会の成立に先きだつて、ロランの業績を自己の人生の理想の鑑とし、ロラン研究を自己の仕事の課題としたり仲立ちとしたりする人々が出現し、そういう一部の人々の横並びの連帯が友の会樹立の機縁となつたと言ふこともできましよう。私見の及ぶ範囲で兵頭正之助やそのグループ、蛭原徳夫・山口三夫、ついで波多野茂弥・山上千枝子・森本達雄・北沢方邦・青木やよひなどがいます。ついでロランへの巨きな精神的傾倒を自覚し、ロランの精神や社会展望の高い意義を汲みつつ、しかもそれぞれ自己の専門分野に踏みとどまり、それぞれの研究分野で本来の仕事をなし続けていた者もいます。——たとえば野田良之・武谷三男・佐々木斐夫・新村猛・村上光彦・清水茂など……。これらに準じる人々として、それぞれの専門分野で研究を続けながら、ロランに親しんでいた者……たとえば高田博厚・長谷川四郎・戸口幸策・吉田秀和・渡辺一夫・長谷川鍊一郎など。

そしてさまざまな専門分野と思想的立場とから離れぬまま、ロランへの讃辞を洩らしている人々、——野上弥生子・小林秀雄・竹内好・荒正人・日高六郎・霜山徳爾・木下順二・丸山眞男・丸岡秀子・長田弘・井土熊野・永田和子・菅井準一・野間宏・松浦一などを付加しましょう……。たとえば丸山眞男（政治思想史学者）はある機会に次のように述べています。「私は『ジャン・クリストフ』を三回読み返した。十数年たった後でも、この本はどのようにも抵抗出来ない得体の知れぬ力で不断に私の意識の上のしかかっている……。その事が一体私の成長にとってプラスなのか

マイナスなのかといった様な冷徹な判断が喰い入る余地のないほどがっしりと羽交締めにされている感じである。……」上記の人々は、きっちりこれらの分類で枠づけされるわけではありません。ことに例挙の際、私見の及ぶ範囲が狭いので、不備な点が少くないことを自覚しています。したがってもちろんこれは必要な文献を仔細に渉猟し、点検した上での研究報告ではありません。

IV

さて私たちはやや長い時間の流れの迂回を経て、日本における〈友の会〉の発足時に達しました。一応のデータを最少限に挙げておきましょう。発足の準備の会は京都（京大講堂）において一九四九年四月に、そして創立の記念の会は東京（神田・共立講堂）で一九四九年六月に取り行われました。六月四日には、片山・宮本・佐々木の三人の講演と、付属して園田高弘（ピアノ独奏）・植野豊子（ヴァイオリン）・矢代秋雄（ピアノ伴奏）と並ぶ音楽演奏会が催されました。

そして同年中に雑誌「ユニテ」（機関誌）の第一号が発刊されました。ただしその後、一時的な断続があつて、この雑誌の再刊第一号は一九七〇年に印刷され、爾後ほぼ順調に進み、二〇〇〇年四月には第二七号が頒布されています。ちなみに〈友の会〉の創立五〇周年の記念事業の一端として、またむしろ研究所の事業の本体としての意味を兼ねて、園田高弘のピアノ・コンサートが、一〇月八日に京都コンサート小ホールで催され、五〇年前と同じ曲目を含めて演奏されました。——しかもこの間、講演会は五六回、研究会はさらにはるかに夥しい回数で、実施されています。

ここで歴史社会での大きな世界動勢を眺め渡しますと、一九三〇年代から一九四五年までは第二次の世界大戦の時代でした。周知のようにこの大戦は、一九四三年九月イタリア、一九四五年五月ドイツ、同年八月日本という相い継

ぐ降伏と敗戦により一応けりがつきました。このあと世界は、経済関係でも政治の動向でも、わけても社会情勢は大きな変化を遂げましたが、戦後の変化の風浪を凌いで〈友の会〉と〈研究所〉は共に健やかに存続いたしました。とは言え、幾つかの変遷はありました。この際には私たちにじかに関わりある重要な出来事だけ記しとどめておきたいと思います。

まず片山敏彦先生が一九六一年一〇月二日に亡くなられ、ついで宮本正清先生は一九八二年一月一六日に永眠されました。(さらにまたロラン夫人が一九八五年四月二七日に逝去されています。)主軸となるお二人の死去は、私たちにとって大きな傷手となりましたが、しかし研究所は、特に宮本エイ子夫人(現常務理事)のご努力により、すこやかに存続され、理事群も亡くなられた方が多く、ほぼ一新されましたが、現在は元監事の尾笠善司氏が理事長となり、その職務を果たされております。

V

ところで〈友の会〉の結成は、まだ緩やかな人間関係の上に築かれた会合にすぎませんでした。宮本先生の考想は、さらに一歩進んで、ロランの精神を汲んで成り立った友愛を基盤とする公けに認知された組織体を作り上げることにありました。つまり日本でのその友愛が社会的に肉づけされて永続するにいたったのです。公益法人(財団法人)としての『ロマン・ロラン研究所』が京都で成立しました。財団としての建物(集会所と文献収容の倉庫・付帯施設など)は、宮本先生の私有財産が供出され、いわば指導部に当たる役員構成(理事・評議員など)も、幾人かの人の相談の上、先生のお考えにより一往確定されました。

出発時における理事会の構成は次の通りでした。理事長は宮本正清、常任理事は波多野茂弥および佐々木昌義(これは東京側の、そして故片山敏彦の代理としての資格で)、さらに理事としては末川博、住谷悦治、岡本清一、山田

忠男、野田良之、小尾俊人、片山治彦（後の三人は同じく東京側の、として位置づけられます。）——以上併せて一名、また監事としては南大路振一および尾埜善司（現理事長）の二名がその任に当たりました。

〈寄付行為〉の名目で京都府教育委員会に届け出された書類から数点の要旨だけをここに申し述べておきます。この団体 (Institut Romain Rolland) の事業目的は、「文学、芸術、思想の研究を通じて、人間相互の理解、信頼、尊敬の念を、日本国民の間、および日本人と諸外国民との間に普及せしめ、世界平和に寄与すること」であり、「その目的を達成するために以下の事業を行う」ことにあります。

ロマン・ロラン、およびロマン・ロランと同様に、芸術、学問を愛し、社会正義を尊重し、世界の各文明の進歩と人間の福祉を念願とした芸術家、思想家などに関する研究。

上記の研究に必要な資料文献の蒐集と研究者への援助。（基本資料としては、主として宮本正清の関連蔵書全部、故片山敏彦の蔵書、のちにロラン夫人から送付された寄贈書などでした。）

機関誌の発行および研究成果の公刊。（これは雑誌「ユニテ」の年次刊行、新しいロラン研究の著書の収納などで実現されて来ました。）

講座、講演会、展覧会等の開催。（この点に関しては、年数回の招待講演者の報告発表、研究所内での読書セミナーなどの多年にわたる集積により表現されています。そしてまたロランの生活と業績およびそれに関わるさまざまな物品・用具類は、みず書房で発行したアルバム（『写真集ロマン・ロラン』一九六六年秋）と、ついで〈友の会〉の指導のもとに、読売新聞社が主催し、東京・大阪・名古屋の百貨店（松坂屋）を会場として、一九七〇年夏から秋にかけて逐次展示され、のち一巻に編まれた、同じような写真集『ロマン・ロラン展』に収められています。また劇団「民芸」が上演した革命劇の幾篇かもロランの魂とその発意とをヴィジュアルに表現した催しであったと言えますでしょう。

本日、私の話に与えられたテーマは、〈ロマン・ロランと日本〉であります。この機会に私は、自己所有の分のほか宮本夫人・小尾俊人両理事のご援助によりかなり広汎圀の参考資料に目を通すことができました。そしてそこで、多種多様な関わり方でロランに結ばれている日本人の姓名や文章に改めてたくさん遭遇しました。初めはこれらの人名（人格）や文章のさわりのそくばくを紹介することが、話題の具体的な趣旨に適しているとも思いましたが、いまそれを網羅的に述べることは至難であると氣づき、断念せざるをえませんでした。

それで一つの思いつきとして、最近作られた『ユニテ』二七号の内容を、例証としてそこだけでもロランの精神の伝統が、いかによく継承され、再現されているかという事実を、筆者・読者・そして私との三者の相互確認により一応責めを果たそうと思いました。

それらは、たまたま内輪の方々と言うべき理事や評議員や会員の寄稿にほかなりませんが、私は少し離れた立場で、つまり偶然の一読者として、外からの眼と心をもって読んでみたつもりです。……まず園田高弘（旧会員）の「ピアノとベートーヴェン」は、ロランの解釈受容の理解に準じる、演奏に先きだってお話の採録であります。これは作曲家・解釈者（ロラン）・演奏者の志向と展望力とが三位一体化したたまものであると感得されました。つい森本達雄のロランとインドとの関わり、村上光彦の「最後の扉の敷居で」におけるロランの高次の宿志、小尾俊人の映画「スペシャリスト」に連なる調和（*unite, harmonie*）のロラン的把握を見握える洞察、濱田陽のロランとスピノザを思想的に結合する真の〈平和〉の眺望、——これらのテーマは、ロランの精神と魂から溢れ出る思潮に、なんと良く深く浸されていて、かつ格調高い発色を漲らせていることか……、そして同じころをもって宮本エイ子の参与する現代の環境運動の、実質的な厚志に富む報告、さらに二人の若い新会員の想いのこもった寄稿にいたるまで、私はふしぎに改まった氣持で、虚心に読み継ぎました。これはいわゆる仲間誉めや俗に言う手前みそではありません。

繰り返して言えば、これまでの先入観からひととき離脱した私の、率直な感銘であり、またロランの人生や世界へのオリエンテーションは、まさにここにも生きていて、という生の感動なまでした。

この号のもう一つ重要な特徴は、私たちが〈友の会〉の会員であり、したがってロマン・ロランを、わが生涯と思想の師として仰ぎ、眞誠自由なヒューマニストであり、かつ諸芸術の秀でた解明者と見なす線と並んでいるとしても——そのため私たちが彼をひたすら偶像視して、当人への批判をことごとく退けるわけではなく、もっと余裕ある考えや態度を持っていることを立証する立場にいる旨を表示できる言説も、ここでは採用されています。それはEurope 誌の第三八号に載せられた、反ロランのきびしい批判の一連の言葉が、村上光彦により邦訳され、転載されていることです。そのほとんどはロランがその信念から選んだ生き方とその表現を烈しく論難するフランスの〈愛国者たち〉——カトリック信徒の一部を含めて——の小詞華集の抜粋の紹介であります。これらは主として旧戦時下におけるロラン弾劾の言論ですが、この種の抄録の掲載は、ある意味で『ユニテ』編集部の特権でもあると考えられます。第二次大戦に際しては、ロランは正面切ってパトリオティズムに対抗するのではなく、病身の彼に可能な限りの人間的な寄与を行いました。

いまも世界中のいたるところで、人種間の、異なる宗教間の、あるいは同じ民族内での政治的党派間の、多様な斗争が勃発し続けています。依然として止むことない、この不穏な状況を前にして、私たちは常にいづれかの分党派派にも属さず、引いては全人類に通じるべきヒューマニズムを体現しており、ある意味では完全に孤立していても、また別の意味では有意的同志と友愛の絆で結ばれつつ、真理と人間性とに仕えて自由な精神を守るべき要請は、ロランの眞の実像から汲みとることができて、これは明らかです。

しかしそういうロマン・ロランの実像にじかに触れるには、すでに亡き人である彼の書き遺した、大量の書きもの——作品、日記、評論、書簡、時に触れてのエッセーなど——に私たちは向かい合わなければなりません。私たち日本人は、もし直接原書と対質できなければ、主だった遺稿の主要なものがほとんど邦訳されている、彼の日本語訳の全集に対接しなければなりません。

ともあれロランと日本人との連帯を強化し、決定的にしたのはロマン・ロラン全集の邦訳版、全四三巻であると思えます。この刊行は〈友の会〉ならびに〈研究所〉の活動と重なり合い、ここでも故片山敏彦と宮本正清との意図が監修の責任を負っているものの、そして訳者たちの努力は当然であるとしても、実際の公刊は主として小尾俊人ならびに高橋正衛や青木やよひを主たる実地の編集者とする〈みすず書房〉会員により積まれた研鑽の成果であると、私は信じております。

これまでの半世紀あまり、個々別々に出版されていたもののほとんどが収容され、しかも主として多くのより正確な新たな訳稿を中心とし、未紹介であったものの新訳も加えられて、背後にある無尽蔵ともいえるロランの書きものうち、一応公表されている分はほとんど紹介されたことになりました。当初は一九五三年の秋、第一期の〈作品集〉、ついで第二期の作品集が一九七九年秋にまとめられたのですが、装いを新たにして第三次の『全集』が四三巻に集大成されました。小尾俊人らは一時総力をあげてその仕事（作業）に当たりました。この全集の完成をもって、ロマン・ロランと心ある日本人との交わりは全面的に可能となりました。その交わり的一端は、日本人に当てたロランの書簡類を読むことにより豊かに補足され、さらに熟知されるにいたるでしょう。

しかし私の報告はきわめて不完全なものであり、一方では経験や記憶を通して既知である事柄や出来事を書き洩らしたことも少くありませんし、四項目に分けての記述にも誤謬や不足分があれこれと含まれているはずで、将来、

私より適任のすぐれた方々、すべてを補足して、半世紀を越えるロマン・ロランと日本人との関りを更めて記録し直し、かつ本国から送られてくる文献を生かして、新たに叙述されることを期待してやみません。

(敬称略)

(成蹊大学名誉教授・社会思想史)

「ロマン・ロラン全集」の出版の頃

— 敗戦、占領、著作権、そして読者 —

小尾 俊 人

私は昭和十五年（一九四〇年）に十八歳でありましたが信州の田舎から東京に出まして、出版社につとめることとなりました。その出版社は羽田書店といまして、当時、「宮沢賢治名作選」とか小穴隆一のさしえ入りの賢治「風の又三郎」などを出版していたのでありまして、私はここでいわゆる単行本出版のメチエを覚えたのであります。この書店主は羽田武嗣郎といまして、当時政友会前田米蔵派の代議士であり、岩波茂雄に私淑してその助力によって昭和十二、三年の開業であったと存じます。この羽田さんという方は、只今民主党の代議士の羽田孜^{とと}という方のお父さんであります。

その後、兵隊にまいりまして、足掛け三年軍隊生活をいたしました。敗戦後、東京に戻りまして、一九四五年の暮れから、新しい出版社の準備にとりかかりました。

そのさいは、出版の編集技術や、印刷所や広告関係などは人間関係をもっておりましたから戦前からの連続として、充分の準備があったわけでありまして。そういう点ではカケダシではなかったのであります。

なぜ元の出版社に戻らないで、新しい出版社を興そうとしたのか？ それを考えてみますと、まず、戦争下で経験したいわゆる出版社の「時局便乗」、当時のことばでいえば、「バスにのりおくれるな」という、刹那的なキワ物商売

がつくづく厭だったことがあります。そして店主の羽田さんの政治家としてのビヘイベア、いわゆる大政翼賛会の代議士としてのオポチュニズムを痛感して、これでよいのかという疑問が大きいのしかかっており、それが強烈な記憶として意識を支配していたからだと思います。

そのとき、偶然だったのですが、私の弟の先生がいまのロマン・ロラン研究所の専務理事の佐々木先生でありまして、そのつながりから片山先生、宮本先生の知遇を得ることができました。「ロマン・ロラン全集」という仕事を生涯の事業として荷うという道に入った、こういう次第でございます。

出版社というのは一つの企業であります。出版社はふつう編集部と営業部に分れております。言葉をかえていえば、前者は文化活動を目標とし、後者は利潤追求活動に専念しています。それはいわばギリシア神話の「ミノトール」(牛頭人身)または「ケンタウロス」(半人半鳥)のような怪物にたとえられましょう。なかなか生存のむづかしい、または存続のむづかしい存在でありますが、しかし、これなくしては、文化または文明は成り立たないのであります。文化の流通を可能にしたのは、本あつてのこと、本屋あつてのことであり、いわば文明の城、文明の城砦であるといつてもよいでしょう。これがなかったならば、「文化」のコミュニケーション、考えること、熟慮すること、さらに感情の洗練というレベルへの向上はなかったのであり、人間という、人の間という言葉が大体成り立ちません。これほどの意味はある存在ではあるのですが、仲々、その存続はむづかしいのであります。

大体、事業家、企業家など、利潤追求の目からは本屋など見向きもされません。三井財閥の基礎をおいた中上川彦次郎は、福沢諭吉の甥でありまして、はじめ、福沢のはじめた「時事新報」の社長になったのですが、この文字を売る商売が、いかに合理的計算がむづかしいか、将来の展望が利かないかを嘆いております。

さて、それはさておき、出版社を他の企業と比較すれば編集部こそ出版業を特徴づける固有的な役割を担っております。ですから、よく言われますように、「椅子と机さえあれば」これは、重工業のように目に見える物質はなく

とも精神的な「何か」quelque choseがあれば、といういみですが、いつでも出版ははじめられる、とも、また一面、伝統とか風格を重んずる出版社、かつての岩波書店のような存在においては、独得の編集スタッフの養成に異常な努力を払った理由でもある、のであります。

そこで、実務的に申しますと、著者の「原稿入手」といういわば「原料仕入れ」であります。これが、仲々複雑でありまして、著者はその生存理由をかけた精神的半身を商品化するためには、ハーフの半ばの商人となり、出版業者の方は逆にハーフの半ばの文化人であらねばならないということになります。つまり、編集者は著作、すなわち原稿内容の意義への共感、その精神的側面を理解しつつ、一方、その現実化に伴う経済的展望を持たねばならない。それは、はっきりなしに活動する社会のなかで、本のもつ経済的側面を厳密に決定し実行に移さなければならぬのです。そして、著者に対する出版条件、長期的には印税、部数、定価についてのとりきめを行わねばなりません。また、「本」という一つの「もの」、芸術品としてのオブジェを創る創造の行為を出版者は著者と読者に対して、実現せねばなりません。これは編集者の美的感覚を限られた資材をつかひながらその本の内容に即して表現せねばならぬということでもあります。

こうした諸条件を十分に貫徹できるのは、大変むつかしいので、古来、外国でも、ミルトン、ジョンソン、ヴォルテール、ベートーヴェン、バルザック、ハイネ、バイロンら著者の側からの出版者への苦情が述べられている、と同時に、出版者の側からいえば、著者の我侷や、世間知らずや、過大な自己評価のために悩まされるということになります。

しかし、著者対出版者の関係がうまくゆけば、交渉が円滑にゆけば、相互の好意と思ひやりのうちに進められれば、そのときはじめて、一つの「出版文化」の形というものがつくられる、と考えられます。

みずす書房の場合でいいますと、このロマン・ロランとの結びつきによって、そのスタートの時期に一つの出版文

化の形への努力、方向づけがすばらしい形で行われた、ということができません。

*

さて、片山、宮本、佐々木など諸先生の御協力を得て、ロマン・ロラン全集刊行のプランが現実にうつされることになり、その広告をはじめ予告として、戦争の終った翌年朝日新聞、一九四六年四月二日版にはじめて掲載されました。

内容見本の請求と予約注文で、広告代が回収できるほどの反響がありました。ちょうどその頃、新居格氏（一八八八—一九五二）、もともとアナキスト運動や日本フェビアン協会の結成にも加わった著名な評論家ですが、この方が「ロランを想起する」という短文を東京新聞に寄せられまして、つぎのように述べられました。

「『ロマン・ロラン全集』の予告を新聞広告で見たわたしは、丁度、アンリ・ギルボアの『ロマン・ロランのため』を読んでいた際とて、注意が深く注がれた。……戦時中すべての文化人がロラン的な理想や感想を否定し、少なくとも曖昧に迷彩を施し、もっとも大切にしていなければならなかった、もっとも内奥の思想を、「紙屑同然に扱った」ことが日本の知識人にはなかったかと思うとき、ロランの態度を、戦後と雖も十分に再考察してみてもよいのであるまいか。わたしはギルボアの小冊子がわたしにとって反省の糧となったことを否認ないのであった。わたしは、その意味からロランを想起した。が、時たまたまロラン全集の予告を見て、これこそ機宜に適した出版だと思わざるを得なかった。ロランは想起されねばならない。」（『東京新聞』昭和21・6・28）

この頃のスクラップブックを見ますと、同じ年、二十一年七月にはロランの「愛と死との戯れ」（俳優座第二回公演）の評が出ております。

「フランス革命を背景としてこの戯曲に描かれる、自由に根差した人生に対する問題は、現在のにも甚だわが国に通うものを持つ。小沢栄太郎、千田是也、村瀬幸子の三者三態にパーソナリティ濃き、しかも非凡な演技力が青山杉作の演出でみごとなみごとな諧調ハモニーを保ちつつ、ロマン・ロランらしいある精神を伝えている。

一七九四年三月末にパリの一老革命議員とその年若な妻が、近づく死の聲音を聞きながら、自由が呼んだ情熱をのりこえ、自由の中にはじめて達しられた清冽な愛情を通して、われわれの心に「真実」が窓を開く。名作はいつの世にも名作であり、これを傷つけなかった成功を認める。殊に幕切れ十数分のうちに凝集した人間性の描出に拍手したい。千乾らび、吼え立て、醜悪なエロチズムに占據されたわが国の舞台が、久しぶりに好もしく、清らかな演劇をつくったよろこびに浸るのは、果たして記者一人のみであろうか。」〔読売新聞〕昭和21・7・29)

また、その頃の本のおかれた状態を思わせる読書界概観の記事もあります。それを読んでみますと、

「用紙も不足しているし、電力や石炭をはじめ、必要な資材が乏しいためでもありますが、最近は大形の書物の出版が余りなく大抵はB6判200―300頁のいわゆる「手ごろのもの」になった。しかし針金の製本がようやく糸のカガリに代わってきたのはよろこぶべきことであろう。装幀も、一時は随分ひどかったが、軌近ではともかくうまくなった。

乏しい資材をたくみに使いこなしたものが多い。この点ではとくに、東京のみならず書房の出版物は一頭地を抜いている。ロマン・ロラン全集も、片山敏彦氏の「ロマン・ロラン」も、しばらく前に出た恒藤、下村、出口諸氏の合著「ヒューマニズム論」もしょうしゃとした立派な装幀である……」〔長沢信寿「荒天に星を拾う」〕京大新聞〔昭和22・9・15〕

一九四五年八月十五日が日本降伏の日であります。マッカーサーが占領総司令官として着任直後、日本の出版物について「日本出版法」というものが九月二十一日に公布されました。これがいわゆるプレス・コードといわれているものですが、その趣旨説明に「連合国最高司令官は日本に言論の自由を確立せんが為茲に日本出版法を発令す」

と書いてあるのですが、全十ヶ条のうち第一条は、報道は厳に真実に則するを旨とすべし、とあるのですが、二条から十条まで、ことごとく文章の末尾は「べからず」となっており、これは、趣旨説明とも、第一条とも、矛盾するものでありまして、まことに軍事占領とはかくの如きものか、の感を深くいたしました。

*

一九九八年から九九九年にかけて、アメリカのメリーランド大学所蔵の「プランゲ文庫」の展覧会が東京と京都で開催しまして（早稲田大学、立命館大学主催）、私も見る機会を持ちまして、改めて、開業時代の出来事を思い出しました。

その展示品のなかに（カタログには写真も載っておりました）、私たちの「ロマン・ロラン全集」の第一回配本として準備していた戯曲「時は来らん」（片山敏彦訳）のゲラ刷一通がありました。検閲官による線引きやチェックがありました。そして表に *suppressed* と書かれています。不許可です。この本は、出版不許可の刻印を押されたのです。

この作品は、イギリス帝国主義の、例のボーア戦争をテーマとして、そのときの將軍の心の内面における精神の葛藤ですね。つまり、自由とか正義・良心というもの——これは人間の心の奥底から絶対のものとして迫ってくるものですが——と、自分が社会から職業としての義務、軍人では殺人、暴力、虚偽などですが、この二つの対立と葛藤をえがいたものであります。アメリカの日本占領とは直接には関連しないのですが、検閲はこれを問題とし、読者には与えるべきでない、と判断したのです。ヒューマニティは、国内的にも、国際的にも迫害される、という一例です。

しかし、問題をもたないものについては、R・Rの著作が伏字もなく遠慮もなく出版できる可能性のある社会となったのです。翻訳書につきましては検閲と用紙制限のため戦争中殆ど刊行不能でありましたから、それらが堰を切った

ように印刷出版されました。統制下のいわゆる表スペースと裏ザラザラの仙花紙の本が多く出ました。そして出版社も二千社とか三千社とか云われました。この状況が約一年二ヶ月ほどつづいたあと、一九四六年十一月一日占領軍の新しい命令が出ました。翻訳出版は翻訳権所有の確認の行われぬ限り、不可能となったのです。そして、外国の出版社に対し、新しく著作権契約を結ぼうとする商業取引は一切禁止されており、一ドル公定360円で、ヤミで400円以上といわれましたが、その送金手段もなかったのです。そういう意味で大変鎖国的になった、占領の実態が強化されたともいえます。

われわれはすでに、全集にとりかかっており、その時までに出版されたものは「時は来らん」に替って出たフランス革命劇の「獅子座の流星群」「コラブルニヨン」の二冊でした。そこで思い出されたのが、片山先生あてのロマン・ロランの手紙（一九二六年八月一日）であります。

「私の友であるあなた方（尾崎喜八と、あなたと、倉田百三と、高田博厚と吉田泰司、それから、あなた（片山）の親友たち）に一般的にこれら新しい友愛のグループに私のどの本であってもあなた方の望まれる本を自由に日本語に翻訳し出版する許可を与えます」

この手紙が一九四七年十月二十三日、占領軍によってアグループされまして、我々の出版活動は継続できることになりました。しかしこの許可書には条件がつけられておりまして、版權所有者のありうべき異議申し立てに対しては、あえてアクセプトすべしということでありました。そして、ゲラ刷は許可番号をそえて司令部に提出しなければならぬこととなっております。

こうして、われわれは一応R・R全集の出版の継続ができることになり、ひきつづいて「愛と死との戯れ」「トルストイの生涯」「エンペドグレース」「ジャン・クリストフ」「ピエールとリュース」「魅せられたる魂」「ペートーヴェンの生涯」……の日本訳が刊行されていったのであります。

なぜR・Rがこのように戦後の日本社会に迎え入れられたのか？ ということを考えてみますと、ロマン・罗兰の紹介はすでに明治末年からはじまるわけですが、それは「日露戦争」以後のロマンティズムの高揚、デモクラシーへの方向づけに副って、主として雑誌「白樺」を中心にヨーロッパ文化の紹介がすすんでまいります。大正七年（一九一八）に第一次大戦が終ります。その前年からの大きな変化として、「中央公論」による吉野作造や「我等」による長谷川如是閑（大正8）、「種蒔く人」（大正10）による小牧近江などの雑誌の主張にみられるような社会的自由を求める批判がつよまってまいります。なかんずく、この小牧近江の「種蒔く人」は、R・Rとアンリ・バルビュスの有名な論争（大正11・8）を連載いたします。また罗兰のフランス革命劇「ダントン」の上演なども計画されています。「夢と死との戯れ」またR・Rの親友マルセル・マルチネの「夜」なども築地小劇場で上演されました。問題は、そのあと芸術家R・Rを尊敬する人と、革命思想家として考えられたロマン・罗兰を尊敬する人々とが、それぞれ分れて、または社会的にひきさかれて別陣営となってしまうのであります。こうした状況が敗戦時までつづきます。また敗戦後もずっとつづきます。

そしてR・Rの全体を知るためには罗兰をその両側面を含む大きなシンフォニーまたはオーケストラとして理解しなければならぬ、オーケストラでは、それぞれのパートはピアノもヴァイオリンもはそれぞれ別の役割ですが、音楽は一つなので、このオーケストラと同じように罗兰理解は罗兰の様々の層をふくむ全体の理解でなければならぬのです。

そのためにはR・Rの個々の作品をすべて含む全集として刊行せねばならない、というのが、その頃の友の会や私共の動機でありました。

当時をふりかえってみますと、「ベートーヴェンの生涯」の序文の「窓をひらけ〈Les fenêtres ouvertes〉l'air libre et purそして自然の風、野の香り、澄んだ空気を入れよ、」という感動を今なお胸のトキメキで思い出すので

あります。

そして、新しい日本が作られるとすれば、まさにこの思想家がその核心を示しているのではないか、と思いました。そして、これは敗戦国なればこそその素晴らしさ、ともいえるものであったのです。若きR・Rの友人であったマルヴィーダ・フォン・マイゼンブークはつぎのように申しております。

マルヴィーダは、一八七〇年の普仏戦争でフランスで敗れたことから、フランスの青年たちが汲みとった教訓、若い学生たちの熱意と真面目さ、から、一般的に歴史上にしばしば見られる教訓の一つとして、

「戦争の惨禍を経験すると、敗けた方が精神的に勝者であるようになることがしばしばある。なぜかという、敗けた方は自分自身の中に沈潜していつて、そこに自分たちの敗北の原因を求め、自分たちの欠点を矯正しようとするからである。ドイツもナポレオン戦争後において同様であった。不幸が英知の学校となる民族は幸なるかな」と。

*

そして、敗戦の二年後の一九四七年に旧い憲法が廃止され、新しい憲法が日本に出来ました。憲法の前文と第九条の武力廃止の条項は、人類普遍の原理たるべきものとして高らかに掲げられたのであります。

一九四五年以前には政治は「国家理性」の表現にすぎず理念^{イデオロギイ}をふくむ文化^{カルチャー}ではありませんでした。新憲法によって初めて日本に「政治文化」が意識化されたのであります。

「文化」というカテゴリーのなかに「政治」を含める、何というすばらしいことでしょう。R・Rの思想と重なるものであったのです。

citoyen という国家の公民と、homme という個人の人間が、ここではじめて同一のものとなるのです。その点で

世界の現実には先がけたすばらしい宣言でありました。

それは現実の世界には実現されてはいないのですが、日本国を先頭としてキッカケとして、世界がそうなってゆく希望の表現として、われわれは考えたのであります。

*

プラトンの対話「国家」のなかに、人間をつまり、皮膚で周囲をかこまれた存在なのですが、これを皮袋にたとえてその皮の中に三匹の動物が住んでいて、ふしぎな社会をつくっている、というお話があります。

その動物の第一は、まず頭の部分です。これは、記憶し、計算し、予測し、それらを結びつける部分で、つまり全体的展望をもつ部分、いわば知恵の部分で第一の動物です。しかし、この精神部分はしばしば身体のことを忘れ勝ちである。しかし、もう二匹の怪物が彼の自己陶醉の夢をぶちこわすので、忘れてもおれない。

二番目の怪物とは、心臓の場所に住みついて、感情、激情の場所であり、力や怒り、豊かさなどで充ちている。勇氣というのも、ここに住んでいる。それは愛の一つの形である。しかし逆転して怒りにもなる。その姿は中腔ちゆうかうになった筋骨がその「力」を表示している。呼吸のたびに刻一刻自分で目覚める作用をもつ。この力によって一切を決する怪物を、かりにライオンと名付ける。

第三番目の怪物、それは横隔膜の下部に住んでいる。これはヒドラ、七つの頭をもった蛇にたとえられる。これは無数の欲望がねそべっている場所であり、欲望とか欠乏とか卑屈とか臆病とかはこの部分にある。こうした三匹の動物が運命的に一緒に住む、いわば社会というものの原始的な型かたぎであります。

その頭脳部にある知恵が、この三者の間に平和をつくらなかったならば、この人間という皮で包んだ袋は、破れ去っ

てしまう。

この人間と社会との対比は大変面白いのですが、やはり、知恵が、人間社会の自然的側面を統御するということが問題のキーをなしている。

憲法問題に戻りますと、これはあるべき規準を示しているわけであって、日常の現実生活はこれとは全くちがうということに外ならない。

ですから上部にある精神の、魂の、知恵の力と、社会の下部にある、横隔膜の下部——にあるような無限の欲望との緊張と戦争、ということがまず現実的な、在るものとして前提とされております。

こうした自覚を持った平和憲法はすばらしいと思います。

*

さきに申し上げましたように、ロラン自身片山あての手紙によって、日本のR・Rの友らは、ロランの著作を自由に翻訳・出版できる許可を与えられておりましたし、またそれは、それとして占領軍によって approve され出版可能となった訳であります。経済的には、未決定のまま持ち越されたのであります。

そうしたところへ、一九四七年六月、昭和二十二年春ですが、R・Rの妹さんであるマドレーヌ・ロランから片山あての手紙が——ヨーロッパから初めての便りが届き、ヨーロッパと同じように、日本でもロランの友の会の設立についての希望がのべられたのであります。ヨーロッパでは、第二次大戦の終結後、一九四五年春から、ポール・クロデルを会長とする友の会の活動が始まっていたのです。

これをきっかけに、つづいてマリー・ロマン・ロラン夫人からの手紙で、ロマン・ロランの著作権はすべて彼女が

ひきついでいること、日本の出版事情についての問い合わせがまいました。

日本のR・R友の会の結成は一九四九年六月ですが、これとともに、友の会のもっとも重要な事業として、ロマン・ロラン全集の刊行は考えられることとなりました。

ロランの本はひきつづきみすずから出版されており、当然のこととして、版權料は積立てられていましたが、しかし定価に対する版權者への支払うべき金額の%は未定で、R・R夫人あるいはフランス出版社との契約まで、正確に定めることはできなかったのであります。

そのときまでは、一般的な著作権契約の慣習例についての知識がなく、ただ占領軍による翻訳書入札が一九四八年五月からはじまっており、これは入札ですから自由競争と、新刊書の枯渇状況という条件下で、最高の印税率は、ジョゼフ・グルー「滞日十年」36%に達するという過熱ぶりでした。

そのためR・Rについては先方の意向尊重ということのために、フランスの出版社はアルバン・ミシェルほか、10%からスタートして、15%に達するという要求となりました。(表紙バックの写真参照)

しかし、これは、ロランの本のような場合には、つまり長期的に売れる本の場合にはきわめて非現実的であります。つまり、率が高すぎるのであります。

宮本先生は一九五〇年十一月にフランス政府招聘で渡仏されました。このとき、ロラン全集の永続とその完成のための先生のたいへんな御努力をいただきました。それは、ロマン・ロラン夫人や Albin Michel との交渉であります。

先生はパリの Archives R. R. (R・R 研究所)でも自らR・Rの書簡草稿などの調査研究をなさいました。

先生の私あてのお手紙を直接つぎに紹介することにより先生の御努力の様子、当時の雰囲気を知っていただけたらと存じます。

*

一九五一年一月廿日(土) 午后

パリ 宮本正清

小尾俊人様 高田氣附の第一便、写真、ありがとう。すぐ、最初の訪問にロラン夫人に渡しました。第二便は一昨、十八日朝つきました。廉子の病氣のこと、家庭のことまで、あなたに御心配をかけてすみません。あなたのお手紙にあるとおり、快方に向ったと、本人からも二度便りがあり、ばくも安心しました。同時に、ばくの風邪(気管支カタル)も、九分通りぬけて、十七日から、ロラン夫人のところに、毎日通って、文献の研究をはじめました。ばくの研究の対象は、「ロランの芸術における生命の高揚の精神」という角度から、資料をしらべたいと思っています。今、マルヴィダへの手紙をしらべています。カイエーに収めたのは、全体の四分の一くらい、全部は、七〇〇通にも達するものです。カナダ人、インド人、アメリカ人、ニュージーランド人、フランス人と、各国の研究者といっしょに、夫人のスクレテールたちもいっしょに、せまい室にいっぱいになって、実に和氣にみち、一つの家族のように仕事をします。夫人は、ばくに対しては、特に親切に、何でも特別にしてくれます。

アルバン・ミシエルの支配人の一人に、月曜(廿二日)の午前十時に、ロラン夫人のところでお会い約束です。契約のことについて、ばくとして、できるだけ努力して、交渉します。こっちの誠意をひれきしてみます。先方が、好意をもって理解してくれば、よい解決がつくかと思えます。もちろん、先方次第で、何とも予測はできませんが、ばくとしてはベストをつくします。(中略)

ロラン夫人の家、つまり友の会の本部については、いろいろお話したいのですが、ロラン研究の文献整理の仕事は大したもの、驚くべきものです。各国の翻訳の多いのもおどろきます。数量、書物の外観体裁からいっても、ドイツと英米が第一でしょう。その点では、われわれの本は、ヨーロッパにくると、色と線が弱く、細く、とかく圧倒され

ます。これは、西洋と東洋との、精神、文化全般の問題とつながっているが、しかし、ぼくたちの本のことだけでも、今後考えて、「世界」の中に、内容はもちろん、外的にも重圧を加えうるようにしたいものです。色や線についても。

アルコスの本が出ました。高田自身も、内容はつまらないので、がっかりしたと云っていました。しかし、高田の批判とは別に、ロラン夫人は、アルコスの本は、実に誤りだらけで、問題にもならないとふんがいています。たとえば、ロランの生れた日も死んだ日もちがっている。ベルギーのドワジイ（ドワジイは文学者ではなく実業家だそうですね）の書いた誤りをそのまま写している。ロラン夫人は、かねて、アルコスに、本を書くなら、印刷する前に、ちょっと見せてくれと云ったが、決して見せなかった、自尊心から。そして、いよいよ本が出てから、さんさんロラン夫人から、実際の誤りを示して叱られたので、すっかり、しょげて帰ったようです。ロラン夫人は、アルコスの本の誤を一々、ペーチ毎の訂正表をタイプして、同書を贈られた人々に与えるそうです。したがって、高田が訳することも、みずずが出すことも、自由だが、ロランを愛する人々のためには、あんな、づさんな、内容のない本は出版しない方がいいと主張します。高田やアルコスとの約束もあって、みずずとしても困るかも知れないが、その点御一考片山とも話してください。（中略）

さて、昨廿二日、アルバン・ミシエルの支配人と、ロラン夫人の室で会いました。話は半分長く、私としてできるだけだけの努力をしましたが、手紙を短くするために、要点だけ述べます。A・Mの云分では、日本の他の出版者からは、数ヶ月来送金がある。みずずから送金がないのは、ミッシェンとブルーを通じて正式の契約ができていないからで、右の順序を経ない契約は全部無効であると、ブルーからA・Mへの手紙を持っています。A・Mとしては、いずれにしても、筋の通った（今日の出版関係における）契約をもつことと、送金を受けることが重要問題です。それで、次の点を大至急御研究の上御返事下さい。

一、ブルーを通じて、契約を新にすれば、金銭の上でどの位損になるか。

二、従来の契約のままで、法規（日仏の出版関係）的に有効であるか。

三、今の契約のままで、ブルーの手をへずに送金した方が有効か。送金の方法があるか。

次に、コピーライトの漸進率ですが、これは、日本の今の経済事情、出版事情、みすずの立場などについて、大いに説明に努めました。この数年の経済界の悪事情のため、大多数の新出版者が倒れたのに、みすずが倒れないし、今後も決して倒れないのは、みすずが、店として事業としての信用と、読者側の信頼支持を受けているからで、片山も私も、小尾氏の事業ではなく、知的協力者として絶対に支持しているから……と。しかし、率が高いことは、非常な困難を、今日では、生ずるので、今少し下げてほしいと。A・M。でもそれは原則的に承知しました。では、どの程度に下げるときかれたので、それは私には、わからないので、すぐ小尾氏に手紙で照会して、返事を待とうということになりました。

右の会談を総合的に見ると、私の見通しでは、率を下げてもらって、ブルーの手を経る以外に正式の途がないなら、その途をへて、契約をしても、送金をはじめの方がよいと思われれます。しかし金のことと、具体的問題については、あなたの方で、判断して、決定して下さい。ブルーに金をとられることは、いささか不愉快でも、これは感情を超越して、実際的な問題ですから、実利を求めればよいと思います。シャゼル氏は、二月出版のマルセイエーズでフランスに帰省する由で、A・Mは、シャゼルの出発前に会って、シャゼルの手をへて、ブルーに会い、（必要があるなら）契約のことを運んでほしいと云っています。しかし、シャゼルに会う必要があるかどうか、ブルーとどんな交渉をすればいいかは、あなたの方でよくおわかりでしょう。シャゼルのような人間に交渉をもつことは全く不快ですが。

次に、コピーライトの率ですが、A・Mに対して、私は、「他の例もあるだろうから、もちろん法外な低率を要求するのではない。合理的な率でいいから」と云いました。A・Mは、最初の五〇〇〇以上というのを、一〇〇〇〇以

上はいくらという風に、変えてもいいと云っていましたが、そういうテクニクのは、どっちがみずずにとって有利だか、私には判断ができないので、それは小尾氏から希望をきくことにしよう、私は答えました。それで、あなたの希望通りの表をつくって送って下さい。それによって、交渉します。これは私の希望的観測で、そうは、問屋や降ろさいかも知れないが、過去の出版物全体にわたって、新率を適用して、なるべく多額（みずずとしてできる限り）を第一回に払い、漸次送金することにしてはどうでしょう。その点で、ブルーの手をへて、新契約をすることが、みずずにとって有利にはなりません。しかし、これは、数字的に私には判断できないので、私の言葉に重きをおかないで下さい。

*

一九五一年六月一日 午後

パリ 宮本正清

五月廿七日に、二週間の旅を終って、パリに戻り、翌廿八日（月）にロマン・ロラン夫人の研究室に行ったら、夫人が「小尾氏がA・Mに送金してきた。これで、小尾氏を信用できる」と、うれしそうに云われたので、私も、ほっとし、心からうれしくなりました。A・MにしてもR・R夫人にしても、われわれを疑っていたというよりも、仕事のなり行きを気にしていたのです。そして、ロランが生存中も、外国の、R・R翻訳書によって出版者は巨万の富をえているのに、R・R自身には、一文の収入にもならないということ、R・Rの記録の中で、たびたび読んでみると、R・R夫人の心配も、たんに私が、サンチマンタルマンに説明し、保証するだけでは、足りなかったわけです。今後は、われわれの云うことにも、いっそう信用があたえられると思います。

一九五一年八月三十一日 午后

パリ 宮本正清

小尾俊人様 八月十四日消印のお手紙、旅先のベルギーで受け取りました。つい、落かぬ、慌しい日々のためにと、なほよく考えてからと、パリに戻ってから御返事をするわけです。十五万円ずつ払うことについては、ロラン夫人に折を見て話します。形勢のよい時に。私の考では、承諾すると思えます。もししなければ、日記の草稿をもらわなくてもいいでしょう。今すぐは。あまり御心配なさらないように。とにかく、あなたも、ぼくも、こうした、商売人の掛引はいやですが。ヨーロッパ人の、ねばりづよい外交には叶いません。しかし、こちらも少し、ずるく、かまえてもいいかもしれません。いずれにしても、A・M、ブルーの、細工なら仕方がないが、ロラン夫人が、ほんとに、主張することだったら、悲しい、情けないことです。ただ、あなたも、ぼくも、もっとあつかましく、づ太くなつた方がいいでしょうが、それができないのが、苦しい原因です。しかし、他の人々の性格も変えることができない以上、また、ベストをつくして対処しましょう。ベルギー旅行中、私はいろいろ考え、私が原稿をかい、片山君に署名してもらって（或はあなたと連名で）、ロラン夫人に出してはとも、思っているのです。いずれにしても、よい方法を考えましょう。こうした、掛引を離れてみると、ロマン・ロランが、もし生きていて、彼に話すのだったら、どんなに、紳士的に、フランス人としては例外的に清純な気持で、ぼくたちの希望を快諾してくれたことでしょう。しかし、こういう、サンチマンタリテは、事業に混じてはならないのですが。」

*

*

さてロラン全集また「ユニテ」への反響の一部をつぎに紹介したいと思います。
「ユニテ」第五号（一九五三年五月）に掲載した會員の聲です。

野田良之先生に 福岡縣 山田耀子

この一月「ユニテ」誌上で〈平和への決意〉を拜見しましてから早や百日餘り過ぎてしまいました。湧き起ったうれしさのまゝにすぐペンをとればよかったですですが、病状の起伏などですっかり遅れてしまいました。〈平和への決意〉をよみましての氣持、どう表したらよいか迷いますが、本當にうれしかったのです、知己（失禮な云い草ですが）を得たおもしろいとも申しましようか。

「革命によって平和を」をよみましたのは昨年の春、平和問題、ひいては人間に對して絶望的な氣持に陥っていた時でした。一語一語にゆずがられてよみました。

……「愛と死との戯れ」の清澄な感銘と共にロランの名は知っていました。「ジャン・クリストフ」の初めの方、音楽との出会いを描いた美しい物語も幼い日の頭に印象づけられていました。でもロランとの交流は、「平和」「平和」と何かを探し求めていた私が、「革命によって平和を」にめぐり合った日から始まりました。たったこの一冊の本が（「ジャン・クリストフ」でもなく「魅せられたる魂」でもなく）、どうしてしっかりと私をとらえ、ロランに結びつけてしまったのか、私には不思議でなりませんでしたが、それも今度わかりました、まさに「誠實さ」だったのです。どの論文も明快なもので澤山のことを教えられました。私のある部分がこっそり作りかえられました。「革命」という言葉はその必要と共にきかされる機會はあったのですが、修身によって幼い時から固められてきた頭には先入観があつて、必要なかもしれないとは思つても漠然とした怖れや嫌惡はどうしようもありませんでした。その先入観がすっかり取拂われたように感じます。「暴力」についても同様、目に見えない、それだけに何倍か危険な暴力、い

わば合法的な暴力をも知りました。更にいわゆる「暴力」を憎む民衆の氣持に乗じたジャーナリズムの共産黨ないしは同調者と見られる人達の扱い方等も……。

仰せのように精神の革命は本當にむつかしいものだと思います、「修身」で鍛えられた心には、そうではないかと考え、更にもっともだとうなづいてもなかく素直に心も共鳴してこないのです。……けれども辯解の餘地なく、何とかこうしたものをのり越えなければと思っております。考えて決心したことはすぐ行動に移すことを身につけなければいけないと、あらゆることにつながって思います。……

明日のためにというそのことに與えられている療養生活の只中にいて、すべての「明日」を破壊してしまう戦争を憎みます。年を單位にする「時」を費し、更に身邊の人達の「時」も盗み、物心兩面に大きい重荷をになわせてする療養。動員された醫師、看護婦、それからメスを執った外科醫の手、投じられた澤山の藥、そうして與えられ拾われて息づいているひとつのいのち、そのいのちと變りはないはずなのに……と玄界灘の方へ消えてゆくジェット機の爆音を、じいんと背骨に感じます。あそこでは瞬時に、澤山のいのちが破壊されつゝあるのです。

長々と順序もなく思いつくまゝにかき連ねましたが、およみになりにくかったことと存じます。……お許し下さいませ。……(以下略)

参考資料

(この初稿は一九七〇年研究所の講演のためのもの、二〇〇一年二月加筆。)

一、ロラン作品（単行本）邦訳の一九四五年以前のものを年次順に収めた。
 一、訳者名の表示で、植村宗一は、直木三十五と同一人であり、野尻清彦は大仏次郎の本名である。
 一、ロランに直接手紙を書いて、序文をのせたのは市谷信義である。「マハトマ・ガンヂー」の訳は市谷、福永、住谷穆、宮本の四点が出た。（このうち住谷訳のみ未見）

ロマン・ロラン邦訳…出版年表

(一九一四—一九四二)

発行年	書名・題名	訳者	出版社
一九一四	闇を破って〔J・C、1・2〕	三浦 閑造	警醒社
一九一五	ベートーフェン竝にミレー	加藤 一夫	洛陽堂
〃	ミケランジェロ	木村 荘八	洛陽堂
一九一六	トルストイ	成瀬 正一	新潮社
〃	近代音楽家評伝	尾崎 喜八	洛陽堂
一九一七	ジャン・クリストフ(1)(2)(3)	後藤 末雄	国民文庫 刊行会
〃	民衆芸術論(新演劇の美学)	大杉 栄	阿蘭陀書房
〃	争いの上にあれ	木村 荘太	天弦堂
一九一八	ジャン・クリストフ(4)(5)(6)	後藤 末雄	国民文庫 刊行会
一九二〇	ロマン・ロラン全集(1) 信仰の悲劇 リルリ	植村 宗一	人間社 出版部

一九二〇	ロマン・ロラン全集(2) 七月十四日、ダントン、ミレー、民衆劇論	木村 荘太	人間社出版部
一九二二	トルストイの生涯	宮島 新三郎	杜翁全集 刊行会 (春秋社)
〃	ジャン・クリストフ(1)~(4)	豊島 与志雄 (豊島訳は一九二三年、全四巻で完結)	新潮社
〃	信仰の悲劇	新城 和一	人間社出版部
〃	ロマン・ロラン全集(3) 現代の音楽家、ベートーヴェン、戦ひを超越して	木村 荘太	人間社出版部
〃	先駆者	細木 盛枝	世界思潮 研究会
〃	先駆者	野尻 清彦	洛陽堂
〃	トルストイ論、先駆者	植村 宗一	人間社出版部
〃	リルリ	植村 宗一	人間社出版部
一九二二	現代の音楽家	木村 荘太	二松堂書店
〃	革命劇三部作(狼・七月十四日、ダントン)	木村 荘太	二松堂書店
〃	民衆劇論	木村 荘太	二松堂書店

一九三二	ミケランゼロ評伝、狼	植村宗一	人間社出版部	一九二六	ミーラー その生活及び芸術	森口多里	弘文館
〃	コラス ブルーニオン	植村宗一	人間社出版部	一九二七	ベートオベン	高田博厚	叢文閣
〃	クルランボオ	野尻清彦	叢文閣	〃	ヘンデル	高田博厚	叢文閣
一九三二	戦争進化之生物学的批判の序文 (一九一八年八月)	山本宣治	内外出版社	〃	花の復活祭	尾崎喜八	叢文閣
〃	信仰の悲劇	新城和一	冬夏社	〃	時は来らん	片山敏彦	叢文閣
一九三三	先駆者	木村荘太	元泉社	〃	マハトマ・ガンヂ	市谷信義	叢文閣
〃	聖王ルイ	新城和一	第一書房	〃	愛と死との戯れ	片山敏彦	岩波文庫
〃	ガンヂー論	福永 渙	アルス	一九二八	群狼	小川泰三	新潮社
〃	トルストイ、ベートーヴェン、ミレー	木村荘太	元泉社	〃	狼、リリユリ	高橋邦太郎	近代社
一九二四	リリユリ	高村光太郎	叢文閣	〃	過去の音楽家	大田黒元雄	第一書房
〃	天文(トルストイ論・ベートーヴェン論・ミレー論)	木村 荘太	元泉社	一九三〇	ベートーヴェン・偉大な創造の時期	高田 博厚	春秋社
〃	ピエールとリュス	野尻清彦	叢文閣	一九三二	獅子座の流星群	片山敏彦	岩波文庫
〃	先立ちて来る者	大沢 章	改造社	〃	信仰の悲劇	新城和一	春陽堂文庫
一九二五	ミケルアンジェロ及びミレー	木村 荘太	新生堂	一九三五	ジャン・クリストフ(1)~(7)	豊島与志雄	岩波文庫
〃	魅せられたるたましひ第一巻 (アンネットとシルヴィ)	布施延雄	至上社	一九三六	ジャン・クリストフ(8)	豊島与志雄	岩波文庫
〃	狼	高橋邦太郎	新潮社	一九三七	敗れし人々	宮本正清	弘文堂
一九二六	近世音楽の黎明(過去の国への音楽の旅)	大田黒元雄	第一書房	〃	闘争の十五年	石井友幸	白揚社
〃	愛と死との戯れ	片山敏彦	叢文閣	一九三八	ベートーヴェンの生涯	片山敏彦	岩波文庫

一九三九	ミレー	鮎原徳夫	岩波文庫
一九四〇	魅せられたる魂(1)	宮本正清	岩波文庫
一九四一	" (2) (3) (4)	"	"
"	ゲエテと音楽?	柿沼太郎	高山書院
"	過去の音楽家	大田黒元雄	第一書房
"	姉と妹 (アンネットとシルヴィ)	高橋広江	今日の出版社
"	今日の音楽家たち	大田黒元雄	第一書房
"	新生印度の預言者 (ヴィヴェカーナンドラの生涯)	近藤宗男	日新書院
"	ミケランジェロの生涯	森本恒夫	二見書房
一九四二	ゲエテとベートーヴェン	古川達雄	二見書房
"	聖雄ガンヂイ	新庄嘉章	二見書房
"	魅せられたる魂(5) (6) (7)	宮本正清	東和出版社
"		宮本正清	岩波文庫

ロマン・ロラン『最後の扉の敷居で』から 2

村上光彦

プリシヤールからロランあての第二信は失われたが、ロランの返信から彼の論点のいくつかは推測できる。この神学生は、相手のソ連観を知ってか知らずにか、共産主義およびソ連にたいする警戒心ないしは嫌悪感をロランに率直に書き送ったらしい。ロランは一九三六年七月二十七日付の手紙のなかでプリシヤールの偏見をたしなめて、一方的で疑わしい情報をもとに、よく知りもしないことを論じたりしないように、と忠告している。彼は言う。

「あなたは理論も事実も知っておられないのです——（さらに、こう付け加えますが、とりわけ人々の魂も知っておられない、魂こそはあなたにとっていちばん大切だというのに）。彼によれば、真実の共産主義は（ある階級を押しつぶして別の階級のもとに組み伏せよう）とするものではなく、階級というものをなくそう、人間をいくつもの階級に区分けするのをやめよう、という目標を目指しているのだ。そして彼はソ連を弁護して、特権階級があらゆる暴力手段を用いてみずからの特権の維持・強化を図ろうとするからこそ、こうした抵抗をうちひしぐ必要が生じてくるのだ、と説いている。

さらに彼は相手が聖職を目指していることを踏まえて、自己犠牲を行うことができるのはキリスト教徒だけだと考えたら大間違いだ、と言いつつだからこう語りかける。共通の大義、共通の信仰、きたるべきより正しい人類のために喜んで全面的に犠牲になろうとする男女を「あなたは見いだすはずです」、自分はソ連でそのような男女を何千人

も見いだしたのだから、と。

彼の口調がこのように激しくなったのは、プリシャルの手紙のなかにある、わが身を犠牲にするためには〈神が来世で報いてくださるという確信〉が必要だ、という表現に違和感を覚えたからかと思われる。ロランの語気はいっそう鋭さを増す。

「わたしは自分の来世など信じてはいません。いかなる報奨も必要としてはいません——この世でも、あの世でも。わたしは人間たちを愛しています。彼らのために、数々の残忍な不正に心を痛めています。それというのも彼らは数百年このかた、いくつかの特権階層の利得のために築かれた社会制度——傲慢なくせに信じやすく、ときとして〈観念的理想主義〉の徒で、人を騙しもするが自分も騙されている知識人が、その制度に奉仕しています——によって、そうした不正のもとに押しつぶされてきたからです。わたしは片時たりとも自分の個人的利益に気を取られることなくして、言うべきこと、書くべきこと、行動すべきことを決定しております。それに、わたしが求める幸福はただひとつ、わたしの努力と数百万の人々の努力とが合わさって、首尾よく人間社会のあいだに（わたしの死後であっても、それはかまいません）より多くの幸福と正義とを樹立できることになるのを知るといふ幸福（それというのも、わたしはそうなるのを知っているのですから——そうと確信しています）なのです。

親愛なるピシャルさん、あなたは信条からしても職業からしても信仰の人なのに、——それでいて、信仰がいかなるものなのか、ご存じないのですね！ 全面的で、充実した信仰は、なんら〈神〉を必要としません。信仰が〈神〉なのです。（わたしの気持ちをおわってください！ この言い方にはかけらほどの傲慢もありません。わたしは申し上げたい。信仰は、自足するものなのです。報奨などいりません！ それ自体が報奨なのですから。）折り紙をつけて申し上げられますが、この信仰こそは、ソ連における青少年全員の——またあらゆる国における数千・数万の労働者の——生活原理なのです」。

そしてロランは手紙をこう結んでいる。——「……」それが事実です。現代は、もっとも偉大な〈目覚め〉——社会的にとどまらず、精神面での、人類の〈目覚め〉——のひとつの時代なのです。——『目があっても、見えず……』。社会主義ないしは共産主義への〈信仰〉というのは耳慣れないから、むしろこのばあいは〈信念〉と訳すべきではないかと思われる読者もおられよう。もちろん〈信念〉のことだと受け止められてもかまわない。しかし後述するように、ロランにとって社会主義は〈啓示〉として立ち現れたのであり、その啓示は宗教的と言ってよい体験だった。そして、社会主義を新しい宗教として信じた人は、けっしてロランひとりというわけではなかった。

*

この手紙が一九三六年に書かれたものであることに注目しよう。この手紙の背景を理解するには、一九三〇年代におけるロランとソ連共産党との関係を想起する必要がある。この問題については、『最後の扉の敷居で』を編集したのと同じベルナル・デュシャトレ氏が、ロマン・ロラン『モスクワへの旅（一九三五年六月〜七月）』（ヘカイエ・ロマン・ロラン）第二十九巻、一九九二年、アルバン・ミシエル社刊）に付した序論が参考になる。ロランの訪ソ以来すでに三分の二世紀の歳月が経過し、その間、スターリンの所業がとうに明るみに出、ついにはソ連そのものが崩壊した。今日、ロランがスターリン時代のソ連を肯定していたかのような印象を与えるこうした言辞は、とりわけロランを師表と仰いできた人々には当惑の種となるう。

どうなのか。ロマン・ロランほどの人がじっさいモスクワに行きながら、すでに少なくとも前年末ごろから過度に進行していたスターリニズムの非人間性に気づかなかったのか。もしそうならロランは案外明敏さに欠けていたことになる。あるいは、彼は見て見ぬふりをしていたのか。もしそうなら、彼は故意に真実を語らなかつたのだと言わざるをえない。彼は盟友シャルル・ペギーとともに「真実を、なによりも真実を」と考えてはいなかつたのか。しかし、

この種の問題については、不親切に速断を下すと誤解に陥る。ある人の言動が不審に見えても、その人の内面的動機に立ち戻れば、疑問点さえ全体の図柄に納まってゆくことがあるものだ。親身になって理解してほしい。

〈真実〉の使徒であり、〈歴史〉にたいし、また人類にたいして誠実に生きようと努力したロランにとって、スターリンが鉄の支配を敷いていた一九三五年のソ連への旅行は、いたるところに落とし穴が待っている長大な難路だった。この難路の踏破を図ったロランの足どりを跡づければ、おのずから二十世紀の精神史——西欧だけでなく、ぼくたち日本人までも捲き込んだ世界の精神史——のきわめて重大な部分の精査に役立つ。この場でそうした大問題に深く立ち入るわけにはいかない。それにしても、戦間期におけるロマン・ロランとソ連との関係は、これだけを切り離して考察すべき問題ではない。それは彼の生涯のすべてと関わる。さりとて、彼の晩年の心境を探るための好個の書物の紹介という本稿の趣旨を考えると、一通の手紙の注釈という範囲からとめどなく逸脱したくはない。より広い眺望を開く試みは個々の読者をお願いするとして、まず二、三の伝記的事実を想起していただく。

ロマン・ロランは幼年時代から〈檻〉に幽閉されているという意識を抱いていた。少年時代に『ハムレット』を読んだとき、つぎのやりとりが彼の内面の〈地下庫の丸天井に反響した〉という。

「——善良なる友らよ、君らは『運命』に対してどんなことをしたためにこの牢獄へ送り込まれることになったのかね？」

——牢獄ですって！

——デンマークは一個の牢獄だ。

——してみると世界もまた牢獄の一つでしょう。

——一つの大きな牢獄さ。その中に、小房や地牢や櫓がたくさんある……」（片山敏彦訳、『内面の旅路』）

これは彼の一家がブルゴーニュ地方の田舎町クラムシーからパリに移り住んで二、三年経ったころの読書体験だ。当時の心境は『回想記』（宮本正清訳）にこう記してある。

「味気ない、脂っこい唯物論的実証主義が養魚池〔高等中学校〕に腐った古油をまきちらした。水中に、吐き気をあたえる汚水のなかに投げこまれた少年は、嫌悪の気持から、救い（どんな救いか？）を求めようとはしないで、口を噤んで、死ぬ……」

この数行を読めば、呼吸器が弱く、つねづね息苦しくてたまらなくなった若者にとって、のちに書く『ペートルヴェンの生涯』の序文の「窓を開けよう」という力強い呼びかけが、いかに切実な欲求に発したものだっかがわかるだろう。もちろん、いつの時代にも青春は明るいとは限らないが、ロランの青年時代が〈世紀末〉と重なっていたことを思いだそう。あの時代には、遺伝・環境・時代が個人の生き方を決定するという思想が流行していた。そこへシヨールペンハウアー流の厭世思想が雪崩を打って入ってきたのだ。ロランがやがてイタリア留学の副産物として『パリオールニ家の人々』や『マントウヴァの包圍』を書いて、〈死んでゆく文明〉〈相互の憎悪のうちに崩壊してゆく旧世界〉といった観念を具象化したことは、世紀末のヨーロッパに腐臭を感じとった少年期の体験と無関係ではありえない。

しかし、周囲の空気を重苦しくしたのは唯物論思想や悲観的な情感だけではなかった。民族主義も異常発酵の徴候を示していた。普仏戦争が勃発してすぐ、フランス軍が当時のヨーロッパの普通の人々にとっては予想外だった敗北を喫して以来、〈復讐〉を呼号する軍国主義がフランスの世論を支配しだし、呼吸しやすい空間を欲している感受性の強い青年の前方に立ち塞がった。『回想記』に一八八八年一月十五日付の感想が引用されている。

「私たち、私たちの青春、一八六六年から一八七二年までの世代がその蔭で過ごした圧迫を後になって理解することは困難だろう。すべての時代に、すべての人間は、すべての若者は、自分が死ぬということは知っている。死はどの瞬間に彼をとらえるかもわからない。しかしそれは決っていない。きわめて一般的な死なので、めいめい、個人的に

は、自分が狙われているということを忘れていた。私たちにとっては、死はいつも現存している。そしてその形は明確である、それは戦争である。[……]

思えば敗戦後、ぼくたち当時の若者がロマン・ロランに共感したのも、ようやく平和になったと思いきや、敗戦国日本がすぐに冷戦構造に組み込まれて、再軍備が進行し、徴兵制復活の脅威がのしかかってきた時代相と無関係ではありえない。長い十五年戦争の末期に少年兵になれる年齢に達しながら、かろうじて《水漬く屍》《草蒸す屍》とならずにすんだものを、いまさら帝国主義の本家の先兵に仕立てられるのはまっぴら御免だった。そこへ立ち現れたのが《万人に抗して平和を》と呼びかけた平和の先達だったのだ。それだけに、もしぼくたちが学生時代にロランの著作をもっと広く、もっと深く読むことができたとしたら、ロランがぼくたちと同じくらいの年ごろに、つまりエコー・ノルマル在学中に軍部クーデター寸前という危機を体験した事実を知っただろう。同年齢のロランの心のなかに入り込むようにして、彼の不安をわがことのように実感しただろう。そして彼が街頭の沸騰状態を見つめながら決意した選択は、ぼくたち自身が取るべき道を指し示しているように思えたらう。つまりロランがいっそう身近な人になっただろう。いまの若い読者がロマン・ロランに共感してくれるものなら!

さて、普仏戦争に敗れ、パリ・コミューンの血まみれの惨劇に立ち合ってからすでに四半世紀、《復讐》のための戦争を待望する勢力が旗印として担ぎ上げたのがブルーランジェ將軍だ。迫り来るファシズムの暗影に気づいた大佛次郎が、暗喩というレトリックを迂回路にして『ドレフュス事件』(一九三〇年)について『ブルーランジェ將軍の悲劇』(一九三五年)を書いてくれたおかげで、わが国の当時の読書人にしても、別々の状況を重ね合わせて読み取る方法を心得てさえいたら、軍人の政治介入が国民の命運を左右する危険を孕んでいることを察知できたのだった。ところまでロマン・ロラン自身、エコー・ノルマル・シュペリユール在学中にこの怪物と至近距離で接したことがある。

「私は一八八七年五月十四日に、エコー・ノルマルの祝典にきた彼をすぐそばで見た。雑踏のなかで、数分間、彼

の体にびったりとくっついて、私は自分の身長で彼の身長をはかり、彼をせんさくした。その冷やかな、猫のような顔、鋭い、そして漠然とした青い眼「……」(『回想記』)。

二年後、政治家に転身した將軍は、フランス各地で下院議員補欠選挙に出馬し、当選してはすぐに辞職、また補選に挑戦するという示威行動をとりだした。一八八九年一月、パリを含むセーヌ県選出下院議員補欠選挙に出馬した白馬の將軍は、大勝利の余勢を駆って大統領官邸に乗り込むつもりだと噂されていた。選挙戦の熱狂ぶりから予測するに、投票日以前にすでに、その事態は可能性どころか蓋然性の域に達していた。一月二十七日、將軍によるクーデター企図の噂が(ユルム街の僧院)(エコール・ノルマル)にまで侵入してくるなか、若き日のロランは日記に書きつけた。「……」もしわれわれが『自由』を失うなら、それは空前の危機となるだろう！ ブーランジェ派の恥ずべき汚点が、いまにフランス全体に及ぶだろう。そうなれば、私はフランスを去るだろう。ここで生活することは私にはもはやできないだろう。自由を否定する国は私の祖国ではありえない！」

ロランは第一次世界大戦末期に、この危機のただなかで(『亡命』)を思案したことを思い返し、日記に当時のことを書きつけている。街頭に右翼が跳梁して騒然たる空気を醸成するなかで、ユルム通りの学窓にあったロランを初め五、六人の仲間(『敢然として独裁志望者反対の激烈な宣言に署名した』)のだった。ロランがクーデター成功の暁には亡命しようと覚悟したのは、彼が生まれるより十五年も早い前例が念頭にあったからだ。一八五一年十二月二日、大統領の地位を占めていたルイ・ナポレオン・ボナパルト公爵(ナポレオンの甥)がクーデターを起こすと、ヴィクトル・ユゴーが自由と共和政とを擁護すべく抵抗運動に立ち上がり、ついではまずベルギーめざして落ち延びた史実を踏まえてのことだ。二十二歳のロランは、いざとなったら尊敬する大詩人と同じ道を辿ろうと思いついて定めていたのだ。ロランが『道づれたち』のなかで回想しているとおり、もともとエコール・ノルマル・シュペリエールには十二月二日を記念する年中行事があった。ユゴーの自由擁護の精神を受け継ごうという思いは、ロランの心のなかでエコール・ノル

マル在学中に確固として形成された。彼がJ・B・セー学院で倫理の時間を担当したとき、生徒たち自身に「レ・ミゼラブル」を声高く朗読させたのは、ユゴーのことが子どもたちの胸のうちに呼び起こす反響の力強さを知りつくしていたからだ。だれかが語ったとおり、ロランほどユゴーに肉薄した人はいないだろう。

その後も、ロランの内面で社会的関心は発酵を続けた。デュシャトレ氏によると、ロランが社会主義に引き寄せられたのは一八九五年以後のことで、彼はそこに時代精神に対抗する支えとなるべき信仰を見いだしたのだという。あのドレフュス大尉が南米ギニアの悪魔島の独房に監禁されていた時期のことだ。じっさい、ロランはこの年の七月、日記にこう記した。

「社会主義思想は、私の意志に反して、私の利益に反して、私の嫌悪にもかわからず、私のエゴイズムに反して、私の心に浸透する。そのことを考えるつもりはないのに、毎日、そうした思想は私の心の中に入り込む」（『回想記』）。

もっとも、彼は社会主義理論を勉強したわけではなく、「一九一四年の大戦のまえには「彼は」マルクスとエンゲルスを読む機会はいちどもなかった」（同上書）という。それというのも、ロランにとって社会主義の発見はまず宗教的体験だったからだ。

二カ月前に社会主義との結縁を自覚したロランは、一八九五年九月、「社会主義の啓示が私の心に浸透するにつれて、巨大な歓びが私の上ってくる」と記している。それは彼が少年時代にスピノザの本を読むうち、文字の列の柵を破って《白い太陽》が輝くのを幻視したときを思わせる感動であり、彼自身、《啓示》というキリスト教の用語を記しているのは、彼にとって社会主義が一種の宗教だった証だ。後年、現実の社会主義が宗教の否定へ向かうのを見て、彼は「社会主義は自己にたいして大きな過ちをしたのだ」と思ったほどだ。

社会主義との出会いよりいくらか遅れて、ロランがドレフュス事件の重大さを悟ったのは、翌年十一月、尊敬するガブリエル・モノー教授から事件の実相を聞かされたときのことだ。ブーランジュ將軍を押し立てる極右勢力の企て

が將軍自身のためらいから不発に終わってから、すでに七年半以上の歳月が経過していた。さらに遡って考察すると、フランスの共和政はつねに左右の危うい均衡のうえに立っていた。一八七三年秋にはまたも王政復古寸前まできたのに、王党派内部の分裂のおかげで、共和政はかろうじて法的に成立したのだった。そしていままた、ドレフュス個人をほとんど口実にして、社会のあらゆる水準において左右の激突が続いたのだ。

ドレフュス大尉がスパイ容疑で逮捕されたのは一九九四年十月のことだが、事件が一般の注目を集めたのは二年後に陸軍省新情報部長のピカール中佐が真犯人としてエステラジーを告発し、さらに一八九八年一月にゾラが『オーロール』紙上に有名な「われ弾劾す」と題した記事を發表してからだ。モノーがロランに実情を告げたのもその合間のことだ。愛国、人權、正義などの観念の意義が問われた。この長期にわたる論戦を踏み台として、社会主義が政治的に有効な勢力として立ち現れた。ロランの演劇作品『狼』（一八九七）は、個人を超えた大義と、一個人をめぐる真実および人權との葛藤を、事件の背景をフランス革命の時代の戦場に移して劇的に表現している。

ロマン・ロランとシャルル・ペギーとがそれぞれ世紀の境目に示した思想と行動との軌跡を瞥見しておく、いろいろな意味で参考になろう。ロランとペギー。この二人はまるきり違って見える。まず、世界大戦が勃発するや、ロランはたまたま滞在していたスイスから「戦いを超えて」の呼びかけを發し、ペギーは勇躍戦場に赴いてマルヌ河の戦場で散華した。だが、表面的な相違にもかかわらず、二人は根本的なところで一致していた。だからこそ、彼らのあいだに〈フランスならではの友情〉が開いたのだ。

ペギーは、学生時代から社会主義思想の実現のために身を挺して闘い、ドレフュスの無罪を確信するや、愛国をすべてに優先させる国粹的な反ドレフュス派を打倒すべく、彼らとの抗争に率先して参加する熱血漢だった。彼は早世した親友の妹と学生結婚し、私財を社会主義のために使いたいという妻の意向もあって、新婚早々の妻の持参金を注

ぎ込んで友人の名義で出版活動を始めた。一八九八年のことだ。翌年九月、ドレフュスは再審の結果ふたたび有罪判決を受け、すぐあとで大統領による特赦を受けた。大統領は被告の無罪を承知しつつ、軍部の面子を潰すまいと姑息な手を打ったのだ。ペギーはこの人権無視の解決に納得できなかった。ともあれ、事件は終息した。その年の十二月、第一回フランス社会主義全国大会が開催された。大会に出席したペギーは、黨員たちが事件の不明朗な決着を問題にせず、むしろ勝利に酔って、利己的な権力欲もあらわに勢いづいているのを見て胸のむかつく思いをした。

このころ、ペギーの会社の経営不振を見て、レオン・ブルムら社会党の領袖が重役として乗り込み、新社を設立し、しかも彼らはペギーの望む出版企画を許さなかった。彼らは党派的でしかも官僚的な性向のままに、ペギーの善意に発した事業をイデオロギー的に自分たちの支配下に置こうとして、その高圧的な態度によって若いペギーと衝突した。ペギーが党の指導部と袂を分かって『カイエ・ド・ラ・キャンゼーヌ』誌を創刊したのは、このときの衝突によって党組織に幻滅したからだ。ロランがそのころ新しい雑誌の創刊を勧めたことも刺激となったようだ。『カイエ』の自立を尊ぶ姿勢は、執筆者本位の刊行形態にも、広告をしない経営方針にも現れている。しかし、もしロランの『ペートルヴェンの生涯』や『ジャンクリストフ』の評判が口から口へと広まって売れていかなかったら、この雑誌は財政的に立ちゆかなかつたらう。こうしてペギーは、だれよりもロランに支えられて、現実の泥土のなかで社会主義の理念を純粹なままに保つ試みのために苦闘を続けた。彼の準則は《自由主義的社会主義》にあった。「その源泉を良心と認識のもっとも深いところに、道德生活の中心そのものに有し、全体的な内心の革命を実現してゆく社会主義」なのだ。ロランはペギーの高邁さを評価して、彼が心から敬愛しているローマ在住のマルヴィーダ・フォン・マイゼンブークに宛ててペギーの仕事の意味を書き送った。《知的であるよりも道德的な選民》《文明の新しい形態に向かつて歩みつつある社会の前衛》だとして。そしてロランのほうも、ペギーのおかげで本格的に仕事を始める場を得た。

ロランは、ひたすら眞実を追求して党派に縛られないベギーの姿勢に心を打たれたが、それは彼自身が心がけていた人生态度でもあった。彼自身『回想記』にこう書いている。

「私の生涯において、どのような共同の行動に参加しようとも、私はそのために自分の精神の独立を犠牲にしたことはけっしてなかった。いかなる党派の人も「……」一八九六〜一九〇〇年のフランスにおいては「……」不寛容が燃えさかっていた。それは私をして、紀律をもたない、教義のない、社会主義的個人主義に閉じこもらせ、軍勢から離れて、義勇兵たらしめた。私は純粹な人間性によるごく単純な若干の原理で満足した」。

さて、単独者でありながら社会主義を奉ずるロランは、その後も周囲の政治的・社会的状況に目を塞いでいるわけがなかった。彼は一九〇五年の末、『ジャンクリストフ』のグラツィアのモデルに擬せられているソフィア・ゲリエリ・リゴンザガに宛ててこう書き送った。この女性は、ローマのマルヴィータ・フォン・マイゼンブークのアパルトマンの入り口で出会って以来の女友だちで、ロランにとって母と妹と並んで、いのちの炎をかき立ててくれる大切なひとだった。それだけに、彼は重大な関心事をおりにふれて彼女に書き送ったのだった。

「ロシアでの出来事を、熱心な注意をこめて見守っています。いまモスクワで起っていることは史上最大の事実のひとつなのです。永久に眠り込んでしまったものと思われていた、あの老いたロシアのただなかに、かくも力強い民衆革命の勢力があるうとは！」

じっさい一九〇五年は、ロシア史上とりわけ重要な年だ。日露戦争の二年目で、ロシア軍は極東において小国日本に苦戦を強いられていた。旅順開城とともに年が明け、三月十日には奉天を占領され、五月二十七日にはバルチック艦隊が日本海海戦に敗れ、ついに九月五日にはポーツマス条約調印によって敗北を受け入れた。戦況の悪化と並行して、本国では一月十六日にサント・ペテルブルグのプチロフ工場で起こったストライキを皮切りに、一月二十二日には聖職者ガボンが数万の群衆を率いて皇帝に請願すべく行進を開始し、近衛兵の発砲に阻まれて多数の死傷者を出

すという（血の日曜日事件）が突発した。この流血が第一次ロシア革命の開幕を告げた。四月から五月にかけて、ボリシェヴィキがロンドンで社会民主労働党大会を開催し、かたやメンシェヴィキがジュネーヴで党協議会を開催する。モスクワ北東の木綿産業中心地のイヴァノヴォヴォズネセンスクからヴォルガ河流域にかけての広大な都市集団において、五月十二日から七月二十三日まで、参加労働者七万人という帝政時代最大のストライキが続いた。ロシア革命史上最初の労働者評議会（ソヴェート）が結成されたのは、五月二十六日、すなわち日本海海戦の前日のことだ。その後、六月には戦艦ポチョムキンの蜂起、八月にはモスクワでの全ロシア農民同盟創立大会、十月、すなわち講和条約調印の翌月には、新聞が、また鉄道がストライキを打ち、それが全国的規模のゼネストに発展した。カデット党（立憲民主党）創立大会、サンクト・ペテルブルグ労働者代表ソヴェートの会議開催、ロシア領ポーランドでのゼネスト、政治的自由および国会召集についての皇帝の〈十月宣言〉、キエフでのユダヤ人にたいするポグロムと、ロシアは全国的に沸騰状態に入ってゆく。十一月に首相に任命されたセルゲイ・ユリエヴィッチ・ヴィッテ伯爵は、クロンシュタットおよびセバストポリでの陸海軍の抗命運動を鎮圧し、サンクト・ペテルブルグ労働者代表ソヴェートを解散させ、その構成員を大量逮捕するなど、高圧的態度を誇示した。しかし、翌年の選挙でカデット党が過半数を占めたため、皇帝はこの政治的敗北の責任を問うてヴィッテを解任することとなる。

若き日にトルストイと文通した人だし、社会主義の成長を長らく見守ってきただけに、ロランがロシアでのこの一年間の目まぐるしい展開から目を離せなかつたのは当然だ。彼は先に引用したソフィア宛ての手紙にこもも書いている。「いまから十年の内に、ヨーロッパで革命がなされるでしょう。ロシア、ドイツ、フランスで、それもたぶん同時に。イギリスはいまひとたび、ヨーロッパ全土からの移住者・亡命者の避難場所となるでしょう。もしかすると、わたしたちはそこで落ち合うかもしれませんね。——いづれにもせよ、見る目を持ち、聞く耳を持つほどの人は、目を光らせ、耳を澄ますべきです。ただいまのところ、世界はありきたりではありません。ただし、しっかり鍛えた心

情を持ち合わせていなくては。お嬢さまがた向きのお芝居ではありませんから」。

同じくソフィア宛ての翌年四月の手紙では、彼は「いまや〈革命〉前夜に際会しているようです」と語りかけている。あらゆるところで武装ゼネストが組織されている、とある。「社会主義の役割は終わりました。労働組合の時代が到来したのです」。彼はそう言って、ブルジョワ対労働者の戦争が早晚勃発する、と予言する。

今日、地球を一種の生命体のように見て、人類はけっして地上のすべての生物の支配者などではない、と反省する人々が現れている。ロマン・ロランはこうした考え方の先駆けを務めた人だ。のちに世界大戦が始まってから、彼は戦争を自然現象と同列のものとして、日記にそのような意味の感想を書きつけることとなる。同様の発想が戦前のソフィーへの手紙にも見られるのは興味深い。「わかったものではないのですが、坑内ガス爆発、火山の噴火、地震、人間どもの狂気が、同じ原因に発するものではないなどと言いつれはしません。太陽とその黒点に影響されて、大地の臓腑が沸き立つのだそうです。太陽がわたしたちの内面に燃える火にもやはり作用してもおかしくはありません。わたしたちは大地、水、炎の子どもではありませんか。宇宙のあらゆる動揺がわたしたちの内面で反響するに決まっています。わたしたちはほかのなにもにも増して敏感で感じやすい受信器なのですから」。

前号で述べたとおり、ロランは二十二歳にして、〈神〉とは宇宙万物にほかならず、宇宙の一部である自我もそのまま〈神〉なのだ、という考えに到達した。自我が宇宙万物の一分子であるからには、太陽の黒点の変動が自我に影響しないわけがない。人類が革命や戦争に明け暮れるのは、太陽の表面で起こった磁気嵐に影響されたことかもしれないのだ。しかし、ロランはやがて、これらの謎めいた力よりも〈精神の自由〉に重きを置くようになった。第一次世界大戦が終盤にさしかかるころ、彼は若い友人のピエール・ジャン・ジュヴにこう打ち明けた。「暗く、力強く、そしてたしかに壮大な諸力にたいして、わたしは知性の明朗な諸力を立ち向かわせる必要を感じた」と。彼は続けて、広大な宇宙的な力に純粋な魂の力を立ち向かわせる必要、とも言い換えている。それはまた、初期の著作に漲ってい

た英雄性賛美から知的に現実に対処する方向へと、ロランの精神生活が決定的な転換を遂げた時期でもあった。

ロランはこれ以後、個人を圧倒する宇宙的な力に金縛りにされて宿命論に陥ることなく、すなわち巨大なアーナンの心を碎かれて諦念に沈むかわりに、自由意志を備えた人間として行動すべく心を奮い立たせてやまなかった。

では、十月革命成功のニュースを、ロマン・ロランはどう受け止めたろうか。おりから、スイスで反戦的な雑誌『ドゥマン』を発行している若い友人アンリ・ギルボーが、時こそ来たれりとはかりにロランにこういう意味のことを言ってくれた。

「レーニン主義者たちがペトログラードでクーデターを行って、その結果、ロシア・ドイツ間の戦争に終止符を打つこととなる蓋然性が非常に高そうだ。まさにこのときにあたり、レーニンの論文を掲載しようと思う」と。

ロマン・ロランにしても、ロシアが戦線を離脱することになるといふ判断に異論はなかったろう。ロシアの政治情勢を長年にわたって観察してきただけに、事態がついに行くところまで行き着いたとき、彼は若い友人と同じく正確な観測を行うことができた。しかし、もともと彼の見方には、宇宙の高みから地球上の出来事を見下ろすようなところがあった。それだけに、革命に向かって突進してゆく社会史の力学を理解しながらも、彼は活動家といっしょに運動のうねりに同調したり、それに身も任せ切ったりはしなかった。騒擾を立ち超える理性人にとって、その騒擾が戦争であろうと革命であろうと、彼の気持ちの置きどころに違いがなかったのは当然のことだ。彼はレーニンの活動を見るのにも、やはり大所高所から総合的・客観的に見定める姿勢を忘れはしなかった。そこで、ギルボーが奔騰する党派的な情熱に駆られて暴走することがないよう、彼は手綱をしっかりと引き締めた。彼は十一月八日にギルボーにこう書き送った。

「親しい友、あなたはレーニン主義者であっても、雑誌『ドゥマン』誌はそうではなく、もろもろの自由な思想に提供された自由な論壇なのをぜひとも思いだしていただきたいのです。わたしはといえば、いまペトログラードで

生じていることを、避けがたいことと見なしてはおりました。わたしはそれでもやはり、ロシアのためにもヨーロッパのためにも同じだけ、これを嘆かわしく思っています。連合国側での国内戦争はすべて——故意にはなくとも、効験あらたかに——プロイセン国王に有利なように作用するからです。ドイツ国内での諸社会運動についてのあなたの見通しが実現してくればよいとは願っております。しかしこの目で見ないうちは、わたしは懐疑的でありつづけます。一国民が軍事的勝利を得ているときに革命を行うなどというのは、《人情のある》（《あまり人情のある！》）ことではありません……」。

ギルポーは、この手紙を読んで辛い思いをした、と返事をよこした。そこでロランは翌日、重ねて物の道理を説いて聞かせた。

「以下の危険、つまり、ボリシェヴィキはいったん権力を入手すればロシアを連合国側から離脱させるだろう、という危険を警戒していただきたかった。ロシア人の見地からならこの決定をどんなふうにも考えられませんが、わたしの考えでは、国際主義者たるフランス人は、これを記録に留めるだけしておくべきです。国際主義者だからといって、フランス人がこの決定を称賛したりしたら、どこか不愉快な感じがするでしょう。いますでに危険と不運とがわが国にのしかかっているのに、こういう行為の結果、危険も不運もいやましにのしかかってくることになります。ロシアとフランスとは、水にはまって溺れかけている二人の男のようなもの。一方の男が助かろうとして相手を溺れさせたなら、そうした気持がわからないとは言いませんが、称賛はできかねます」。

このときギルポーは、ドイツ国内でもロシア革命に触発された動きが起こるものと幻想を描いていた。ところがロランはというと、すでに「戦いを超えて」を発表したとき、期待していたドイツの知識人の反応が芳しくないのに落胆を味わった人だ。それ以後もドイツの政情を注意深く見守ってきたこととて、その点で若い友人の希望的観測には同意できかねたのだ。それに彼は、リーブクネヒトやアドラーがドイツでいかに孤立しているかを知っていた。

ポリシェヴィキと情動的に一体化していたなら、レーニンの率いる革命の勝利をすべてに優先させる気になったろう。ところがロマン・ロランは、党派を超越して事態を客観視しようと努める精神の持ち主だから、一面ではレーニンやその周囲の革命家に共鳴できても、彼らが絶対的真理の持ち主などと認めようとはしなかった。彼なりに待望していた社会主義革命の成就が近いように思えても、そこに不審な翳りが見えるかぎり、彼は独立独歩の人として党派人に白紙委任状を渡す気にはなれなかったのだ。なによりもロランがロランであるかぎり、革命の美名に飾られていようと、暴力を手放しで是認する気にはなれなかった。戦争とともに暴力そのものを断罪した人だからだ。

戦間期のロマン・ロランの思想の歩みを辿りたければ『社会論集』がある。また本誌の読者は第二十六号所載の柏原康夫氏による好論「ロマン・ロランと『種蒔く人』」によって、当時のロランの基本的な立場を承知しておられよう。もう『最後の扉』の時期、つまり神学生、修道士、神父たちとの誠実な対話が深められていった時期に進む。

この注釈でいま問題にしているレーモン・ブリシャールの手紙への返信は一九三六年七月二十七日付のものだ。そのころヒトラーは野望の実現を目指して着々と前進していた。その危険な情勢に対抗して、同年一月にはフランスでもスペインでも人民戦線が広範な支持を獲得していった。二月にはスペインで、また五月にはフランスで、それぞれ総選挙で人民戦線が勝った。ファッショ陣営も牙をむきだし、三月にはドイツ軍がラインラントに進駐し、ヒトラーはヨーロッパ七カ国間の平和を相互に保障すべきロカルノ条約（一九二五年十月に調印）を破棄した。五月、イタリアは前年に侵略を開始したエチオピアを併合した。問題の手紙が書かれた時期には、フランコ將軍による軍事蜂起がスペイン本土に及びつつあった。

この時期のロマン・ロランの心境は、一九三六年二月まで『ウーロップ』誌の編集長を務めていたジャン・ゲーノ（政治的陰謀と財政上の利害とが混ざり合った事情から、ゲーノは陥穽に落ち、編集長の座から追われた）への手紙

からもかいま見ることができる。

「情勢は危険なまでに悪化しています。情勢がフランスにとってこれほどまでに脅威に満ちていたことは、かつてなかったほどです。フランスは孤立し、西欧でのその主要同盟国〔単数形だから、英国を暗示しているのかもしれない〕によって、また自国にたいして国内戦争を準備している同国人によって、裏切られているのです。おりしもライン河のほとりに死の暗雲が濃くなっているときなのに、『平和を！』と叫ばなくてはなりません。しかし平和を樹立しようにも、フランスただ一国だけでどうなるものでもありません。ヨーロッパの協力がなくては、平和は平和たりえません。ヨーロッパの平和。ヨーロッパのための、またヨーロッパによる平和。だれがまだヨーロッパを再結集できるのでしょうか」（一九三六年三月二十四日付）。

この手紙を収めた『精神の独立——ジャン・ゲーノ・ロマン・ロラン往復書簡』が刊行されたのは一九七五年（いまは亡き山口三夫氏による邦訳が、一九八二年に全集第四十一巻としてみず書房から刊行された。ただし本稿では、心もとないが別の解釈を試みることにした）のことで、その序文を執筆したのはアンドレ・マルローだ。すなわち、まさにこの書簡集の背景をなす時代を生きて、行動する作家として反ファシズムの闘いの先頭にあった代表的二十世紀人だ。当時のマルローは容共的で、『侮蔑のとき』（一九三五）の序文のなかで「共産主義によって、個人はみずからの豊沃さを回復できる」と書いている。また彼は、一九三四年にソ連を訪れたさいには「もし戦争が勃発したら、外人部隊結成のために尽力し、その戦列に入って、銃を手にして、自由の国たるソヴェート連邦を防衛しよう」と語りもした。そしてロランは『闘争の十五年』のなかでマルローのこういう発言を引用している。「ソヴェート社会の根本的な結果として、一種のヒューマニズムを再創造できる可能性が出てくるものと信じている」と。

さてマルローは、ロラン・ゲーノ書簡集の序文を書きながら、はたして一九七五年の読者に三〇年代の状況が理解できるものだろうかと気にしたらしい。この文章が書かれてからすでに四半世紀。六、七十年前の、しかも遠いヨ一

ロッパの状況を理解するには、二十一世紀初頭の極東の読者としては、マルローが序文執筆時に念頭に置いていた読者と較べても格段の知的努力を要する。ともあれ、彼はそのなかでこう述べている。

「これらの手紙が書かれた時代には、赤軍は脆弱で、フランス軍は世界一だと思われていた。

時の経過による変貌が加わったのは、ただ諸国の軍隊のみでもなければ、またこれらの手紙が倦むことなく攻撃を加えていた強国——当時の世界最大の強国——が消滅してしまったという事実にもとどまるまい。単語は昔のままでも、それが指している事柄のほうはすっかり違っているのだから、翻訳しないことには意味がわからないのである。

強い赤軍も、〈恐怖政治〉も、独ソ不可侵条約も出てこない。スターリンはごくかすか。

だが、反ファシズムは別である」。

一行空けて、マルローはすぐにこう続ける。

「反ファシズムはファシスト諸大国ともども消え失せてしまった。いまの二十歳の青年男女にとっては、その残存物といったら、もはや単なる抽象にすぎないのではなからうか。あまり研究されてこなかったが、〈消極的情熱〉というものがあつた。みずからの対象を養分とするより、むしろみずからの敵を養分として生きる情熱である。それでいてこれらの情熱は、今世紀のもっとも恒常的な情熱のうちに数えられる。一九七五年にあつては、左翼の定義といつたら滑稽なもので、右翼の敵の全体ということになるのではなからうか。——そして逆もまた然り、ということに。

一九三四年にあつては、ファシスト諸国は右翼以上に重くのしかかつてきた。それらの国々は攻撃用戦車との取り組みがもっと進んでいた。そして反ファシズムはいえ、スペイン戦争——スペイン戦争は、知ってか知らずに、この書物のエピソードをなすのであるが……—が示すことになるように、自由主義者と共産主義者とが入り混ざって闘っていた、あの広大な戦場だけに限られていたわけではない。反ファシズムとは、ひとつの感情であり、ひとつの態度であり、さらにまたひとつの政策でもあつた。ヒトラーが選挙戦に勝利を収めたのち、スターリンは社会主義

諸派との闘争を断念し、左翼全体との団結を目指した「……」。

この決定がなかったら、いかなる〈人民戦線〉も生まれるわけがなかったであろう。

「……」反ファシズムを忘れようものなら、この本はわかりにくくなってしまふであろうが、まず第一に現代史がわけのわからぬものになってしまうのではないか。諸国に〈人民戦線〉を、という呼びかけは、単一の重合局面のなかからでたために生まれたのではない。それはヒトラーの脅威に対抗すべく、ソ連によって、狙いを定めて呼び起こされたのである「……」。

しかし、以下のことをよく理解しよう。スターリンの政策は、アジア諸国に共産党を作りだしたような仕方では、なんら諸国の〈人民戦線〉を作りだしはしなかったのである。ヨーロッパにとって、スペインにとって、知識人にとって、〈人民戦線〉とは人民とプロレタリアートとを和解させることによって〈フランス革命〉の遺産を引き継ぐことであつた。

戦場で生死の境を彷徨したすえに、かろうじて故国に戻つた世代が先細りになってゆく。つぎにそのあとを追つて、かつて軍国少年だったがゆえにファシズムの脅威を身をもって経験した世代が去つてゆく番だ。願わくは現代史を学び、想像力によって過去を再生させながら、先人の志を主体的に継承しようとする人々があとに続いてほしい。そうなれば、マルローが危惧したような〈変貌〉による〈歴史〉の変質はよもやなからう。

ロマン・ロランの思想と行動とに戻らう。彼はその本性からいって、共産主義とは同調しきれない人だつた。それでいて、ロシア革命を初めから熱心に見守り、〈史上最大の事実のひとつ〉として評価していた。デュシャトレ氏は『モスクワへの旅』の序論のなかで、ロランが一九二四年にガンディーの友人チャールズ・フリーアー・アンドルーズにあてて書いた手紙を紹介している。ロランはそのなかで「ワシントンよりはモスクワのほうが好きです」と明言しながら、「しかし、そのいずれからも独立を守ると申し上げます」と書き送っている。同じ序論に、彼がヘルマン・

ベルンシュタインにあてて一九二五年に書いた手紙の一節が引用されている。「わたしは共産主義者ではありませんし、けっしてそうはならないでしょう。氣質が、思想が、わたしの全存在が、これを嫌っていますから。それでもやはり、わたしの共感ソヴェート・ロシアに向かうのです。なぜかという、この国は老いたヨーロッパのただなかにあって、若いのちと豊かな自発性とに満ち満ちていますから」。

たしかにロランの友人のうちには、彼よりも早くソ連の矛盾に気づき、その点に彼の注意を向けさせようと努めた人たちもいる。しかし、ナチスが台頭してからは、彼は氣質的な異和感を抑えつけて、ほかのなによりも反ファシズムを優先させなくてはならなかった。ロランが〈反ファシズム世界委員会〉の委員長として一九三五年六月〜七月にモスクワを訪れたのは、スターリンに呪縛されたからではなく、ソ連を排除してヨーロッパ文化をファシズムから防衛することはできないと考えたからだ。なによりも、ファシズムと闘う必要がそれだけ切迫していたからだ。

しかし、ロランがいかにロシア革命を評価し、その達成に邁進する民衆に好意を抱こうと、現地の空気に触れれば、期待と現実との落差に気づかないでいられるわけがなかった。すでに彼の訪ソの前年の十二月には、ジノヴィエフとカメーネフとが逮捕され、明けて一九三四年一月十五日にはモスクワ裁判が始まっていた。デュシャトレ氏によれば、ロランがモスクワに着いたのは、まさにスターリンと反対派とのあいだで最後の死闘が始まったときだった。

フランスにいてはわからないことがわかってきた。スターリンにたいする個人崇拜もそのひとつだ。ゴリキーと会ったときには、彼が途方もない悲しみを押し隠しているような感じがした。しかもゴリキーのまわりにはいつも人がいて、彼に泣き言めいた本音を言わせないように見張っているような気配があった。

第一に反ファシズム戦列の歩調を乱してはならないという配慮、そのほかさまざまな理由があって、ロランはスターリン支配下のソ連の実態を公然と語ることができなかった。しかし、安心できる相手には話すつもりだった。たとえば、彼は帰国後まもなく、「ひどくお疲れでなかったら旅行の話を書いてください」といつてきたジャン・ゲーノに

宛ててこう書いている。「そうです、お話ししたいことがいくらでもあるのですが。もうすこししたらそうできると思います。いや、話し合わなくてはいけないのですが」。

そして四年後、独ソ不可侵条約が結ばれ、赤軍はポーランド領に侵攻した。ロランは「もう憤慨する力もない」とか、「ソ連は突如として貪欲な帝国主義を剥き出しにした」とか、日記に書き留めた。できることなら、彼は実相を洗いざらい公表しただろう。しかし、妻のマリーの家族がソ連にいるし、彼女と先夫とのあいだの息子がそこへ帰っていかなくてはならないため、ソ連当局の報復行為が彼らに及ばないよう、ロランは沈黙を守らざるをえなかった。

ロマン・ロランとソ連との関係については、本誌第十九号所載のタマール・モトウルオーヴァによる「ロマン・ロラン——『私の擁護しているのはスターリンではなくソ連なのです。自由な諸国民の大義なのです』」や、第二十二号所載のデュシャトレ氏の講演「神秘と政治——ロマン・ロラン、その思索と行動のあいだ」をぜひ読み返していただきたい。ここでは前者の「後記」で小尾俊人氏が書いている数行だけ再録しておく。

「しかしロランの影響力が、スターリン政治に利用されたことは明白であって、この点からロランがスターリン体制下のロシア・インテリの間で、例えば詩人アフマトヴァとか、音楽家シヨスタコヴィチとかに嫌われたことはいろいろな証言で明らかである。ロランの立場は、ヨーロッパ文明の自己批判であり、来るべき人類の未来への関心であった。彼は二十世紀の腐敗にたいして、新しい生命更新力を求めたのである」。

ロマン・ロランがスターリン支持者だったとするような誤解があったことも、その誤解が生じたのが無理でない事情があったのも確かだ。しかし、彼の真意を知る努力をするならば、彼が抱いていた（来るべき人類の未来への関心）を、もう始まってしまった新世紀、新千年紀に生かすことができるだろう。いまのところ、わが国におけるロマン・ロラン受容は、いわば蝕の位相にさしかかっている。蝕が終わり、光が差ししてくるのを待ち望もう。

ブルゴーニュの小さな村で

ロマン・ロランのお墓を訪ねて

佐久間啓子

昨年の九月、ブルゴーニュの小さな村ブレーヴにある
ロランのお墓を訪ねました。

彼を紹介する本で、死後バンテオンで眠るといふ名譽
より生まれ故郷の名もない墓地を選んだ、と書かれてい
るのを読んだときから、いつかそこを訪ねてみたいと思っ
ていました。

特に手入れされるでもない村はずれの共同墓地に、
ROMAIN ROLLAND ET SA FEMME MARIE と記さ
れただけの長方形の墓石が横たわっていました。墓石を
包むような緑の茂みのほかには、余分なものはないもな
いお墓でした。

私がロランと出会ったのは二十代のとき、宮本百合子
を通してでした。「アンネットの裡には、不羈な自由精
神があつて」ということばにひかれてです。これは一九
二七年、『婦人公論』に「私の好きな小説の主人公」と
いうテーマで書かれた短い文章です。百合子がロランに
強く関心を寄せていたことは他の評論の中でもロランの
ことを「自分の遭遇した時代の種々さまざまな矛盾を、
もっとも偽りない心で悩みつつ頑強に人類の幸福とより
合理的な社会を求める熱誠を棄てなかつた人」などの贊
辞でひきあいに出していることでもわかりますが、「魅
せられたる魂」は翻訳が出版されるのを待つて読んでい
たようです。その時点では一・二部までを読んだだけだっ
たのですが、「アンネットは自分の心がどのような生活
を欲しているかをはっきり自覚し、そのために境遇の膳
立てに逆らつても、自己の生活方向、方法、内容を自
力で決定しようとする女性なのです。」と紹介していま
す。

で、さっそく買ってきた「魅せられたる魂」でしたが、
そのころの私は身の自由を求めてがむしやらな生活に

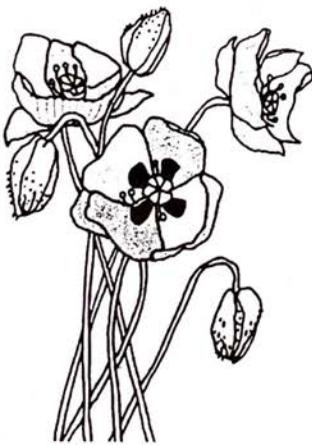
明け暮れていたものですから、アンネットは気にかかる存在だったので、ほとんど本棚の中に取りました。それからずいぶん長い時間がたって、自分の悪戦苦闘ぶりを振り返ることができるようになってきたころから、やっと私は彼女に近づき、親しくなり、いつかその声が自分の心に響いているような感じになりました。

あるとき、ヨーロッパの鉄道時刻表をめぐっていて Veselay の駅の名を見つけたときの嬉しかったこと。そしてその後、二度、三度と訪ねるたびに親しみを増すブルゴーニュです。

ブレーヴへは、ロマンの生地のカラムシーと晩年を過ごしたヴェズレーを結ぶ道路を途中で南へ折れて行くのですが、車がなければちょっと難しい場所です。訪ねたのは秋晴れの月曜日の午後、タクシーを頼みました。案内を乞うつもりだった役所は閉まっていた（週に数日しか開いていないそうです）、その先は、親切な女性の運転手さんと二人、探し行きますと、とうとう見つけた小さな標識の先に、確かに墓地がありました。

残念ながら私はロマン・ロラン全集を持っておりませんので図書館へ参ります。ロランの棚の前に立つと、高くて深いものをなにも掴めないまま暮らしている自分のことが恥ずかしいような……でもそんなとき第五巻のコラ・ブルニョンに目をやって、私はこれでもいいんだと励まされたり……です。今はロランの書いたものを手にするときに、なにか清冽な幸福感みたいなもので身体が満たされるように思います。

（賛助会員）



ロマン・ロラン研究所と自然破壊(続)

「ユニテ」二十六号でご報告いたしました当研究所北側に隣接する小山、半鐘山の開発に対して多くの方々からお問い合わせをいただき、あらためて環境問題の重要性を痛感しているところです。「はじめに山ありき」ところが山の運命は私たち人間の手に委ねられているのです。

この三年、あらゆる角度からこれまで以上に半鐘山と向かい合っていました。古の都人が日出るところの東山として崇めてきた山麓のわずかに残った先端、つい数年前までは大文字のある如意ガ岳、月待山、北白川山から尾根伝いにこの小山に入ることができました。残念ですが、三十数年前から隣接の丘陵開発が進み、小丘が消えていきました。そこに最後の一軒が建って、ついにこの聖域も寸断されました。半鐘山はこれらの丘の精霊

を集約し、小さいながらその姿を今も凜と留めております。朝に夕にこの杜から呼吸を聴き、木々のざわめきに目をやり、生命のリズムを全身でいただいております。せめて、この孤独な小山の行く末を、わたしは見届けたと思うに至りました。

この杜の運命は日本各地に点在する緑地に共通する課題を内包しているのです。

以下に I 〈経過〉 II 〈周辺の歴史風土〉 III 〈登記簿での検証〉 IV 〈今後の課題〉 などについてご報告していききたいと思います。

(宮本エイ子)

I これまでの経過

半鐘山はただ今のところ健在です。しかし開発中止になつたわけではありません。

1、緑保全運動

—平成十二年七月二十八日

この日、業者の開発申請を京都市は受理いたしました。受理すなわち許可に繋がります。少なくとも三週間以内で許可が下りると聞かされていまして、私たち住民は「申請を受理しないで、住民合意が議会で採択されているでしょう」と役所に訴えました。片や「法的に何ら問題ないのに、なんで申請受理せんのや」と、お百度踏みの業者は役所の担当者に詰め寄り、京都で一番暑い祇園祭の最中、左京区選出の議員たちも巻き込んで、市役所ロビーで三者、四者喧々囂々の場面が繰り広げられました。議員方は、ここまでは住民に与し、ここからは法律だから仕方なしとの姿勢です。

—十二年八月二日

この申請受理を受けて、私たち住民は、市長、市会議長、都市計画局長宛に公開質問状を提出しました。「住民合意を尊重した行政指導」「緑地保全」を求めるという平成十一年三月十日の請願が、京都市議会で採択されたにもかかわらず業者の申請を受理したのは議会軽視も甚だしいのではないかという趣旨です。

これに対する市側の回答は、議会採択も法的な強制力はなく、行政手続法、都市計画法によって法的に受理せざるをえないという決まり文句でした。受理しなければ、逆に市が業者から訴えられるというものでした。業者が住民の意思を尊重して開発を自主的に取りやめて貰うように他に方法がないとお手上げ状況です。

私たち住民はこれまで市、府に許可しないように陳情、要望書を繰り返し提出し、あきらめていないことを示すために絶えず運動を続けてきました。さらに町内や市民、観光客にも理解していただくために、北白川天神さん・シンポジウムやサロンコンサート、ガレージセール、街頭でのチラシ配布を続け、「乱開発反対、半鐘山の緑を

守ろう」の青や緑の染め抜きの幟を町内の家々や大通りなどに立てて、思いつくことはすべて出し尽くしてきたつもりです。

あとは仏と神だのみと、お門違いだと言われようと、門前払いになることも意に介さず、元の所有者の銀閣寺へも知恵を授けて戴くために参りました。銀閣寺の本山相国寺管長が理事長を務められる、景観に厳しい主張をされている京都仏教会が、今後力を貸して下さることを期待しております。

これまでわたしたち住民側は、京都市、(開発指導課、風致保全課、左京区選出議員団、市会事務局) 十五回以上、京都市(土木建設課、左京区選出議員団) 三回以上、左京土木事務所四回以上、下鴨警察一回、公害審査会、左京法律相談 各一回、住民集会と対策会議 三十回以上、勉強会(地質、土木、橋梁、擁壁、などを専門家から学習) 七回以上、ダンプ実況検分一回、顧問弁護士からのレクチャー三回以上。

請願書提出 「住民合意を求める」署名二四一七筆、「緑保全」五四二四筆、の署名を集めるための近隣町内

まわり。北白川町連合会による回覧板での署名六〇〇〇筆と多種多彩に活動してまいりました。

2、業者との話し合い

一方、運動をすればするほど、法律の壁にぶつかり自ずと限界を感じてまいりました。法治国家、私有財産最優先となれば、業者との話し合いをして接点を模索せざるを得なくなる現実に追いやられました。業者との話し合いを拒否すれば、住民の声はいっさい汲み上げられず、話し合い拒否として住民は置いてきぼりの見切り発車となる可能性もあるのです。

業者の公的説明会六回、左京区選出の有力議員立ち会いのもと、銀閣寺前住民との話し合い四回、業者の各戸別訪問二回をうけて、お互いに歩み寄る以外に解決の糸口が見いだせない状況となっています。

もし緑を保全したいなら「あなた方に売却してもいい」ということまで議題にのぼり、四億五〇〇〇万円の大金が必要であることもわかってきました。

3、業者は行政提訴の構え

ところが予測に反して、半年以上経った現在もまだ許可が下りていません。なぜ許可がおりていないのでしょうか？ 住民の勝ちかと思いきや、住民運動が功を奏しているのではなく、京都市と京都府の調整が二転三転しているらしいのです。真相はわかりません。私たち住民には明確に示されていません。私たちの前でお互いに責任を回避しているようにみえます。

京都市…法的に認可せざるをえません。時間の問題です。いずれおきます。

京都市…市の開発許可があるので、橋の許可を下ろさざるを得ないのです。（*市道との接続のため）

市の開発許可がなければ橋の認可はしません。京都市…橋の認可は府の権限だから、府は「橋は架けられない」と言えば、こちらでは開発許可は出せません。

京都市が開発申請を受理した七月の時点では、市と府は同時に許可を下ろすという内々の調整ができていました。このことは私たちにも明らかにされておりました。

注…「開発許可を申請しようとするものは、あらかじめ、開発行為に関係がある公共施設の管理者の同意を得、かつ、当該開発行為または当該開発行為に関する工事により設置される公共施設を管理することとなる者その他政令で定める者と協議しなければならない。……」（都市計画法・三十二条）

都市計画法三十二条では、公共施設の管理者の同意を得るため隣接する一級河川、白川を管理している京都府の同意を得なければならないのです。

——十二年十二月二十八日、

暮れの押し詰まったこの日、京都府は知事名義で「都市計画法、三十二条同意」を出しました。その書類を業者は持参して市へ行けば京都市、開発課が許可というシナリオでした。ところが、その文書の文言の一部が市当局をして受理できないということになって、結局二十一世紀へ持ち越すことになりました。

業者は「とても持ちこたえられません、金利は嵩むし、

このままではやっていけません。うちは法律を侵していないんです。府と市を訴えます」と。

II 周辺の歴史風土

現在の半鐘山は、西側に白川、西北側が天神さんの杜、残りわが家を含む銀閣寺前の民家でびっしりと囲まれ進入道路すらありません。もちろん遠い昔、私たちの民家はありませんでした。が、いま問題になっている業者は、白川に橋を架けて開発しようとしております。ところが、白川周辺の「地の人」から猛烈な反対を受けております。地の人というのは何代も同じところに暮らす人々で、銀閣寺辺りの人たちもそうですが、彼らの歴史といえは平安時代まで遡り、背負う荷がとて重いのです。

白川、白川村

白川は比叡山と如意ガ岳の間を水源として山中越えに沿って北白川の東北端から流れて、琵琶湖疏水と私たちの銀閣寺前町で合流しながらそのまま南西へ南禅寺西に

至って鴨川へ注いでいきます。白川は鴨川のような大きな川ではありませんし、蕩々と板のように流れるヨーロッパのような川でもなく、昔は自然の石が急斜面にごろごろしながら、山桜や薄紫の山つつじが川岸を装う山深い雰囲気をもった日本独特の川でした。その風情は、『枕草子』『今昔物語』『平家物語』などにも出てくるらしいです。

あとで述べますが、昭和六十年頃、災害防止のためとして河川改修工事がありました。コンクリートに固められた水路化した深さ十メートル、白いガードレールで柵が施されました。この都市近郊型の土木工事によって、落ちたら助からない怖い川に変貌しました。

白川村は「この里は洛より近江の志賀坂本への往還なり。志賀山越えという。……」（『都名所図絵』近世）と記され、東海道とは別に近江へ行くもう一つの道の入り口でした。また平安時代以来、土地の産物を洛中に売り歩いた白川女の里でもあります。今でも時々かすり着姿のおばさんが花や野菜を売っている姿を見かけます。男

の人たちは、北白川の里人と称われ、石工を業として、山に入って石を切り出し、灯籠手水鉢、その他さまざまのものを作っていたことが、明治四十一年の調査として記録されています。白川石、白川砂は庭石として珍重され国内はもとより米国へも輸出されていたとのことです。白川石の石質は花崗岩で柔らかく好事家好みです。わが研究所内にもほんなりと優しい雪見灯籠として置かれましたが、柔らかくもろいので阪神大震災の折りに崩壊しました。

駕籠や徒歩の時代の旧志賀山越道を、すでに現在、車の往来が頻繁で危険きわまりない状況ですのに、このうえ半鐘山開発のためダンプやミキサー車が十分おきに入るとなれば、パニック状態になることは明白でしょう。

鎮守の森 北白川天満宮

疫病流行の折り、延喜八年、九〇八年銘の黒鍔が宮中より拝領し、社宝として残されている北白川天満宮は、半鐘山の鎮守の森です。もとは国土を守る少彦名命を祭

神とする白川の産土神、農耕神でした。神社は五〇〇メートル南西あたりにありましたが、文明年間（一四六九―八七）足利義政の発願で現在の地に移ったという事です。目でわかる寛文と刻まれた一六七三年の石の鳥居が残っています。一八三〇年「ええもんやけ」と呼ばれる大火で北白川一帯はほとんど焼失、この鳥居だけが残ったと伝えられています。

半鐘台がおそらくこの大火を教訓にその後設置されたのではないかと私は推測しています。いつ半鐘台が置かれたかということは宮司さんや古老に尋ねても頭を振るばかり、大正末まであったということだけが返ってきます。

銀閣寺領 民家借地

半鐘山は昭和五十八年まで銀閣寺領でした。寺宝の古い絵図では西方山として描かれているそうです。執事をしておられた世統氏の話です。

銀閣寺こと臨濟宗相国寺派慈照寺は、いわずとした室町時代を代表する文化遺産です。応仁の乱後の一四八

二年、晩年の足利義政がすでにあった浄土寺の境内に山荘を造営したことに始まって、義政死後の一四九〇年、義政の菩提を弔うため、山荘東山殿を寺に改め創立したことは日本の歴史となっています。

戦時中は半鐘山に隣接しているわたしたちの民家がお茶、野菜などを栽培するための借地として活用されてきました。一年分くらいのお茶が充分賄える位の苗木が残っています。隣同士が表玄関からではなく裏側の山を通じて声をかけあったようです。

浄土寺村

わが研究所のある銀閣寺前町は、昭和三十年代頃までは浄土寺石橋町といわれていました。古くは浄土寺村です。応仁年間（一四六七―六九）後、稲や粟、茶などの農作物の耕作者が村落を形成して銀閣寺建立より先にあった浄土寺の名にちなんで浄土寺村ができたといわれています。浄土といわれるように、葬地でもあり貴人が葬られたところでは、いつの時代のものか知りませんが半鐘山に墓碑がいくつあったと聞いています。白川改修時

に北白川の禅法寺に移されたそうです。

この村で最もよく知られていますのは、八月十六日の死者供養の施餓鬼として死者の霊を送る大文字の送り火があります。

Ⅲ 登記簿で検証

高度経済成長、日本列島改造論に端を発した開発の波が日本全土を浸蝕し、土地神話をもたらす前兆期でした。不動産建設業者、近畿土地が「あそこの山を売ってくれ」と所有者の銀閣寺へ何度も足を運んでいたそうです。

次のようなことも囁かれました。「近畿土地が開発をあきらめたのは、白川改修の時の京都市からの土地買収があったから、黙ってじっとしてたんや……」と。パブルへ向けて他所で利益を上げて緑の山を維持していたのでしょ。

これから見る登記簿は平成十年一月二十八日発行による昭和五十八年（一九八三年）から平成十年（一九九八年）までの記録です。

土地は三つの所在地に分割されていて、それぞれ日付順に所有者氏名が明らかにされています。また〈土地の表示〉に所在、地番、地目、面積、原因及びその日付、登記の日付。

〈所有権に関する事項〉に登記の目的、受付年月日、原因、権利者その他の事項などそれぞれ記載されています。

〈土地の表示〉

所在が三カ所に表示されています。

- ① 銀閣寺前町…地番四一―一、山林 三三〇九²m²、
- ② 銀閣寺前町…地番三八―二、宅地 二四、六²m²
- ③ 北白川下池田町…地番七八番、墳墓地 二〇四²m²

〈所有権に関する事項〉

◎一番古い日付けを見ますと

まず上記① 所在地四一―一山林、三三〇九²m²が 昭和五十八年十二月十日売買によって小森信次郎に。つまり銀閣寺が小森氏へ売却したことが判明いたします。

上記② 所在地三八―二宅地二四、六²m²、は昭和五十

九年十二月二十日交換によって小森信次郎に。銀閣寺のどこかの土地と交換したことが判明。

上記③ 北白川下池田七八 墳墓地二〇四²m²は昭和五十九年三月十四日売買によって小森信次郎に。銀閣寺が売却したことを示しています。

◎銀閣寺は不動産業者小森氏に半鐘山の大部分を売却したことが実証されたわけです。

私の記憶に寄れば境界線を確認したいから立ち会ってほしいといわれ、その時初めて銀閣寺さんが近畿土地株式会社へ売却したことを知ったのでした。昭和五十九年九月十七日の日付、小森信次郎と隣接者宮本正清のあいだで境界に関して「土地境界確定協議書」が交わされています。立会者銀閣寺庶務課長 奥山修様と記入された書類が手元に残っています。

◎近畿土地が半鐘山の持ち主になったとき開発問題が起きたらしく昭和五十九年三月、銀閣寺前町町会長名で「開発反対」請願が出され、五月に市議会で採択されたことが三年前にやっと判明しました。この請願に関して

わたくしは全く知りませんでした。

それゆえ今回の請願採択は二度目になるわけです。

◎白川改修に伴っての建設省への売却があったと風評されていますが、土地の分筆が昭和六十一年七月三日になされているのでこの部分に違いありません。その際お墓がたくさん出てきて北白川の禅法寺へ持っていったことは先にもふれました。

△銀閣寺前町四十一―三、山林二二二㎡

三二八四㎡、四一―一、四一―二に分筆 六十年一月三十日

三〇八二㎡、四一―一、四一―三、四一―四、に分筆

昭和六十一年七月三日

三八番から分筆

昭和六十一年一月三十日

一五四㎡ 七八番、七八番四に分筆 昭和六十一年七月三日

△銀閣寺前町四一―四、山林七八㎡、

△北白川下池田七八―四 墳墓地四九㎡

昭和六十一年七月三日、二四九㎡を京都市が折衝して建設省に売買していることが判明しました。このことは市役所の河川課で確認いたしました。金額はいえないと

のことでした。

隣接の民家がこの白川改修に伴って同様に建設省売却があり、新聞紙上で公表されています。〇家の場合、一九八四年 昭和五十九年、一〇四㎡ 二六六〇万円で売買。

墳墓地と記載されているので、お墓があったこともうなずけます。お墓が特別の史跡であれば事態が違っていたか、それとも見逃していたか、まったくわかりません。

平成九年六月四日、相続が原因となって所有権移転され、H・M名義となりました。

平成十年一月二十二日、売買によって、今問題の開発業者、幸田工務店ことエステート・オーミに所有権が移っています。が、同日、所有権移転仮登記を目的に代物弁済予約によってスキ商事が権利者となっています。幸田工務店がスキ商事から借金をし、もし返済できない場合、担保としてこの山の所有権を失うことを意味しています。代物弁済予約は、サラ金がよくする方法で普通はしない

そうです。

銀閣寺↓近畿土地（当時）社長小森信次郎↓H・M↓
エステート・オオミとスギ商事

IV 今後の課題

半鐘山は銀閣寺前町と北白川下池田町の二つの地域に
跨り、二つの地域を北と南に分けていた重要な境界嶺と
なっていたことが二つの町名からわかります。

古老が伝えているように、大正末期まで火の見櫓、半
鐘台が置かれていたそうですが、比叡山から將軍塚まで
望みできる市街化区域の貴重な高台です。

京都には、市街化区域内に半鐘山のような緑地が三十
数カ所あるそうです。現法のままでは開発は阻止できま
せん。京都市は緑の基本構想で、常に緑は守るとアピ
ルしています。法律で守られていないところを守ってこ
そ、行政は「緑を守る」と公言できるのではないでしょ
うか。

欧米諸国の土地利用法は、十九世紀末の乱開発が問題

となって、二十世紀初頭に絶対所有権から社会化の方向
に進んでいったといわれています。このように土地所有
権の概念は〈所有権の社会化〉が通例となり、さらに世
論によって自然環境が最優先として保護されており、
日本における自然・緑地保全法は、一世代以上の遅れが
あることを認識せざるをえません。何でもかんでも欧米
化している中で、二十一世紀の大きな流れ、環境問題こ
そ、第一に学ぶべき重大課題ではないでしょうか。

殊に日本人の心の故郷としている京都に求められてい
るのは、都市の景観と市街化地域にある小緑地保全こそ、
豊かな緑、ひいては生命の水をももたらす重要な鍵と確
信いたします。

追記 京都市都市計画局から開発許可が三月二十九日、
下りました。私たち住民は、京都市の開発審査会
へ審査請求を出します。

研究所だより

ロマン・ロランの日記が解禁

二〇〇〇年の幕開けとともにロマン・ロランの日記が公開されました。二〇〇〇年二月二十九日、閏年のこの日、日記を管理しているフランス国立図書館で関係者四名立ち会いのもと封印に錠が入りました。国立図書館学芸員、ロラン夫人ともずっと親交のあったマリー・プレヴォーさん、パリ大学の遺産管理責任者コレット・ステファンさん、ロラン研究家ベルナル・デュシャトレ教授、そしてパリ大学名誉教授ロジェ・ダドワン氏です。ロマン・ロラン夫人が亡くなられた一九八五年以降、ロマン・ロランの手書き原稿や著作物はフランス国立図書館とパリ大学が法的に管理してきました。日記類は五十年間、現存する関係者への配慮から公開されませんでした。

半世紀以上凍結され、「ロマン・ロランって誰？」といわれる時代ですが、私たちロマン・ロラン研究者にとってまさに待望の宝島であります。

ソ連が崩壊した現在、ロマン・ロランがソ連に対して抱いた幻想が日記のなかでどのようにつづられていたのでしょうか？

第二次大戦の最中、一九四四年十二月三十日没したロマン・ロランですが、敵国からも自国からも敵視されながら「戦争反対」を訴えた第一次大戦の『戦いを超えて』のあの勇々しい調子はやわらいでいましたが、フランス首相、ダラディエに「ヒットラー率いるナチスドイツを倒せ」と公開状を出し、「ファシズム反対」を唱えるロラン翁でありました。宿命ともいえるべき戦争とのつながり、生まれるときは普墮、普仏戦争の狭間で、ロマン・ロランの一生は戦争と闘い続けたのです。

戦渦のなか、理性を持ち続けた誠実なユマニストがどのようにその生を閉じたのでしょうか？

すでに、デュシャトレ先生が、ロマン・ロラン夫人の許可を得、日記をチェックして、『モスクワ紀行』『最後

の敷居の扉で」など出版されています。後者については本誌「ユニテ」で村上光彦先生のご尽力によって紹介しておりますが、日本でも翻訳出版されることが望まれます。

私たちは、日に日に押し寄せる事件の渦に翻弄され、昨日の大事件が忘れ去られる時代に生きています。刹那的になった今日社会で、二十世紀前半に活躍したヨーロッパの良心ともいうべき人の証言がどれだけ私たちマスメディアに汚染された種族の社会に届くでしょうか。見守りたく思います。

ただひとつ、歴史を展望するとき、「ジャン・クリストフ」(二十一世紀に残したい世界の十文学作品)——読売・読者アンケートによる選出——の作者が残した膨大な著作、手紙、日記の数々が、二十世紀を精査、検証するうえで不可欠で確実な資料となることは間違いないでしょう。

(E・M)

† 落合孝幸様が二〇〇一年二月二十七日肺炎のため亡くなられました。九十二歳。

同氏は第二次世界大戦時にパリ滞在中の改造社山本実彦社長に同道して、ロマン・ロランを訪ねました。その時のことを、「ユニテ」二十三号に「ロマン・ロランの面影」として寄稿くださいました。心から哀悼の意を表します。



6・4	ロマン・ロランとベートーヴェン	青木やよひ				尾埜 善司・今江 祥智
9・27	ロマン・ロランとデュアメル	村上 光彦				中野 雄
10・25	ロマン・ロランの思想の二面性	兵藤正之助		10・14	神秘と政治	ロマン・ロラン、その思索と行動のあいだ
11・29	初めにロマン・ロランあり	岡田 節人				B・デュシャトレ
6・26	〈大洋感情〉と宗教の発端	岩田 慶治			ロランとフランス革命	河野 健二
9・25	ロマン・ロランとイタリヤ	戸口 幸策			自然科学とゲーテ	岡田 節人
10・30	ロマン・ロランの革命劇をめぐって	鶴見 俊輔		12・3	ロマン・ロランとドイツ音楽	岡田 暁生
11・27	宮本正清 没後十年記念追悼会				——ベートーヴェン、デュカ他作品	
	静かにやさしき顔	佐々木斐夫		12・24	おはなし「ビエールとリュス」と「また逢う日まで」	ピアノ演奏…小坂 圭太
一九九二	不思議な静けさ——宮本正清の世界	小尾 俊人			映画上映「また逢う日まで」(監督 今井 正)	今江 祥智
1・29	自伝的諸作品について	佐々木斐夫		一九九五		
一九九三				1・27	ロマン・ロランと日本人たち	小尾 俊人
1・29	ロマン・ロランの演劇的世界	石田 和男		6・2	私の歩んだフランス文学の道	片岡 美智
5・24	ガンディーとロマン・ロラン	山折 哲雄		11・10	ロマン・ロランとR・シュトラウスの周辺	岡田 暁生
6・23	「魅せられたる魂」を語る(前)	重本恵津子		一九九六		
10・15	「魅せられたる魂」を語る(後)	重本恵津子		6・14	ロマン・ロランとの出会いから	鄭 承姫
一九九四				11・16	レクチャーコンサート	岡田 暁生
1・28	いま、ロマン・ロランを語る					

- ベートーヴェン…ピアノソナタ 第21番、28番
 11・18 「戦間期のリベラル」経済学から見たロマン・ロラン
 ピアノ演奏…北住 淳
 一九九八
 10・8 ロマン・ロランと種時く人 柏倉 康夫
 9・25 ロマン・ロランと政治的魔術からの解放 柳父 罔近
 10・30 ロマン・ロラン記念コンサート
 ピアノ演奏…小坂 圭太
 レクチャー…岡田 暁生
- 「主体的精神と普遍的人間愛」ロマン・ロランと
 魯迅 區 建英
 わが青春と一生 岩淵龍太郎
 9・19 ロマン・ロランと結核の時代 福田 真人
 10・4 ピアノとチェロのための夕べ
 ピアノ演奏…北住 淳
 ロマン・ロラン記念コンサート
 チェロ演奏…小川剛一郎
 一九九八
 2・23 ロマン・ロランと〈老いの豊かさ〉 青木やよひ
 シンポジウム 今井 祥智
 尾埜 善司
- 二〇〇一
 10・13 ロマン・ロラン没後五十五年と日本 佐々木斐夫
 12・1 お話と演奏「ピアノとベートーヴェン」 園田高弘
 ロマン・ロランとインドの精神 森本 達雄
 10・8 日本ロマン・ロランの友の会五十年記念コンサート
 ロランと音楽 岡田 暁生
 園田 高弘
- 月例会の〈読書会〉は二二二回（日本ロマン・ロラン友の会
 時代から数えると三三七回を迎えます。
 一九九八年度から『魅せられたる魂』を読みはじめて二〇〇
 一年三月で読了。発表者は有馬通志子、北条文子、島谷亜希、

能田由紀子、濱田陽、森元寿子、清原章夫、富田武の各氏、一九九八年六月に特別講師として小尾俊人氏、二〇〇〇年七月に樋口茂子氏、二〇〇一年一月、佐々木斐夫氏作曲『魅せられた魂』の歌を下郡由さん。好評を博した。

任期満了に伴う役員改選

財団法人ロマン・ロラン研究所 役員名簿

二〇〇〇年五月現在

理事 *理事長

今江祥智（児童文学者）、*尾埜善司（弁護士）、

小尾俊人（元出版社編集長）、佐々木昌義（成蹊大学名誉教授）、

野村庄吾（花園大学教授）、松居直（福音館書店会長）、

宮本エイ子（仏学史研究者）、森本達雄（名城大学教授）

以上再任

監事

稲畑勝雄（稲畑産業会長）、西村七兵衛（法蔵館社長）

以上再任

評議員

折田忠温（福祉施設長）、加藤澄子（主婦）、

永田和子（元高校教師）、

能田由紀子（国際電気通信基礎技術研究所・研究員）、

西成勝好（大阪市立大学教授）、

濱田陽（京都大学・大学院博士課程） 以上再任

清原章夫（グンゼ・研究員） 新任



財団法人ロマン・ロラン研究所設立趣意書

設立者・初代理事長 宮本 正清

ロマン・ロラン（一八六六—一九四四）は、日本人にもっとも強く深い、精神的、道徳的影響を与えたヨーロッパの芸術家の一人であります。武者小路実篤、志賀直哉等の白樺派の人々をはじめ、高村光太郎、尾崎喜八、大仏次郎、小島政二郎その他の作家、音楽家、画家、彫刻家、さらに科学者、実業各方面にいたるまで、その青春時代をロマン・ロランの思想、芸術の光に照らされ、人格的感化陶冶を受けた者は枚挙にいとまないのであります。

しかし、ロマン・ロランの真の偉大さと、存在価値は、たんに文学的分野にとどまるのではなく、むしろその博大な人間愛にあります。人種、文化、文明等のあらゆる国境を越えて、真に世界的、人類的である彼の愛の精神は、「ジャン・クリストフ」「魅せられたる魂」その他の小説、戯曲、伝記、文学的、音楽的、歴史的研究のみならず、現代社会のあらゆる不正と戦うために、人権と自由を擁護するために、多くの政治的、社会的論争を生涯つづけました。さらに、ロランは、東洋と西洋、ヨーロッパとアジアとの相互理解、信頼、尊敬と両者の協力が、人類の進歩と平和のために、いかに必要であるかを説き、われわれの文明を墮落と頹廃から救いうる唯一の道は、アジアとヨーロッパが、あたかも車の両輪のように支持し合い、各人種、各国民がユニークな文明、固有の伝統を尊重、保存して、人類全体の偉大な共有財産として、現存のそれに勝る大文明を創造すべきだと言っております。ロランは、インドの哲学、宗教を研

究した数巻にわたる著述の中で東洋の精神のもっとも深遠で高邁なものは、西洋のそれと本質的に異なるものでないばかりか、両者がほとんど完全に一致していることを実証しております。このような思想家、芸術家、偉大な人間が、わが日本において、半世紀以上にわたって、変ることなく、今もなお、青年層に親しまれ、愛読され、尊敬されていることは、日本のために、喜ぶべきことと信ずるのであります。

一九七〇年十二月

◆現在の主な三つの活動

ロマン・ロランセミナー

公開講座

●講演会

●読書会・研究会

●機関誌「ユニテ」発行

◆ロマン・ロラン研究所賛助会員について

●ロマン・ロランの著作に感動、また

●彼の周辺の芸術家たちに興味、

●あるいは、ロマン・ロラン研究所活動に共感

いずれの理由でも結構です。皆様のご賛同をお待ちいたしております。

●特典①機関誌「ユニテ」の配布。②賛助会員の参考に資する情報、資料等の提供。③公開講座無料。

●会員①一般賛助会員は年会費一口五千円。特別賛助会員は年会費十口以上。

二〇〇〇年度 賛助会員、寄付者名簿

(アルファベット順・敬称略) *特別会員

有馬通志子 蘆田ひろみ 浅井 幸 芦田 友秀
 安倍 道子 浅野 幸作 シッシユ・D・由紀子
 五島 清子 濱田 陽 福田 真人 福井 友栄
 福田万紗子 古家 和雄 *本郷美智子 林 次郎
 日野三三三 樋口 茂子 北条 文子 石原 和子
 *稲畑産業株式会社(稲畑 勝雄) 今江 祥智
 井土 熊野 井土 真杉 伊砂 利彦 乾 昌明
 岩坪嘉能子 神谷 郁代 片岡 美智 梶本 智美
 加藤 澄子 河合 一穂 狩野 直禎 清原 章夫
 喜多 寿子 北垣みどり 河田 厚公 岸田綱太郎
 熊木 秀雄 小牧 久時 近藤 正雄 栗林 弘
 峯村 泰光 松居 直 宮内 幸子 村山香代子
 前田 和子 前田 政昭 本野 妙子 森内富美子
 森本 達雄 宮本エイ子 森久 光雄 村上 光彦
 松井 菊恵 西村七兵衛 西村喜代子 西原久美子
 永田 和子 能田由紀子 西成 勝好 野村 庄吾
 中山 冲彦 乗金 芳子 小尾 俊人 小田 秀子

折田 忠温 大出 學 落合 孝幸 大川起示子
 岡部 素行 奥 和義 *尾埜 善司 大谷 史朗
 大谷 綾乃 大谷佳世子 李 珣淑 *佐々木斐夫
 *三友居(山本 勝) 坂谷 千歳 佐藤 弘
 佐久間由紀子 佐久間啓子 島谷 亜希
 志賀 鍊三 下郡 由 杉本千代子 鈴木 文代
 新宮恵美子 田中阿里子 田代 輝子 田間 千晶
 多田 淳子 富田 武 竹本 浩典 竹下美砂登
 谷口けいこ 長 美穂 徳永 勲保 馬木 紘子
 宇佐見英治 梅原 ふさ 氏家 玲子 安田 俱子
 山下 雅子 吉原 圭子 山本 信子 八木美佐子
 山下 真子 ヴァンチュール・ミシユル
 柳父 圀近

(計 一、〇三〇、〇〇〇円)

あとがき

二十一世紀のスタートの年、ユニテ28号を送り出すことができうれしく思います。

今年が研究所が発足して三十年目の節目です。この東洋の国にロマン・ロランに魅せられた人たちが掲げた灯火は先輩方のご努力で守り続けられ、三十年の月日を経て二十一世紀へとバトンタッチすることができました。これも皆様方がお寄せになったロランに対する熱き思いに支えられてのことです。佐々木斐夫氏の「ロマン・ロランと日本」、小尾俊人氏の「『ロマン・ロラン全集』の出發の頃」によく表われていると思います。本当にありがとうございます。

今年に入っても暗いニュースが続いています。世界各地で民族紛争や宗教の対立による戦争も絶える気配がありません。暗い時代が去り明るい未来がやってくるとは決して言い切れない二十一世紀の幕開けです。

ロマン・ロランを知る若者たちもだんだん少なくなっているように思えます。だがいま、私たちはこのロラン

の火をかかけていきたいとの決意を新たにしています。

本号も前号に引き続き、研究所の裏山・半鐘山の自然破壊に関する報告を掲載したのも、私たちの決意の一つの現れです。自然環境問題は二十一世紀が引き継ぐ人類の最大の課題です。もしロマン・ロランが今の時代にあつたら、この問題にもっと深い思索をささげたことと思います。

(野村庄吾)

ユニテ 第二十八号

発行日 二〇〇一年四月二十日

発行者 (財) ロマン・ロラン研究所

理事長 尾 埜 善 司

京都市左京区銀閣寺前町三二

電話・FAX

(〇七五) 七七一―三二八一

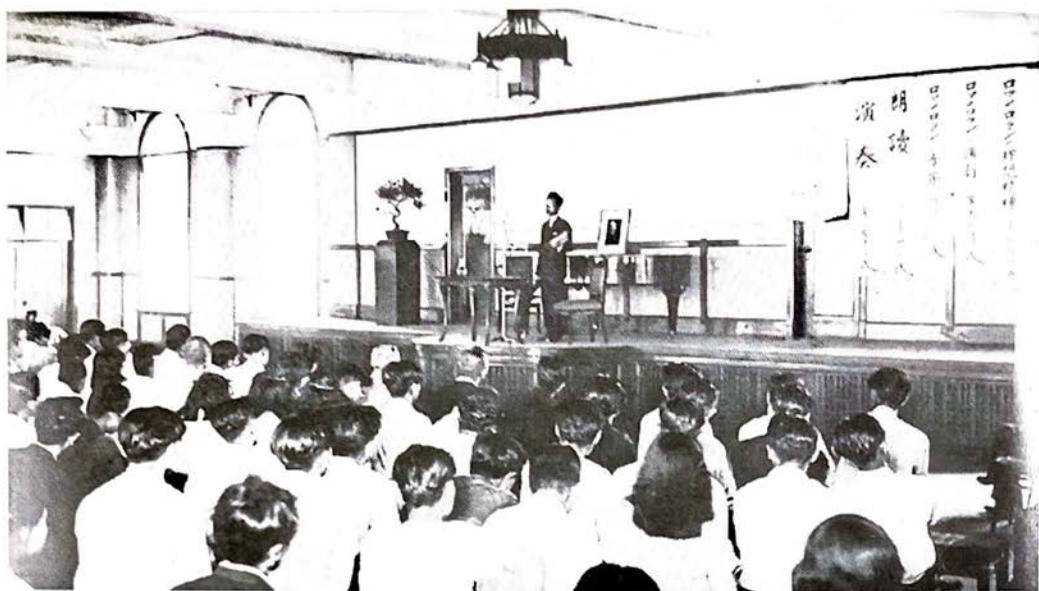
郵便番号 六〇六一八四〇七

郵便振替振込口座番号

〇一〇五〇―九一五九九九六

印刷所 (株) 北斗プリント社

URL <http://www2u.biglobe.ne.jp/~rolland/>
E-mail rolland-miyamoto@mtf.biglobe.ne.jp

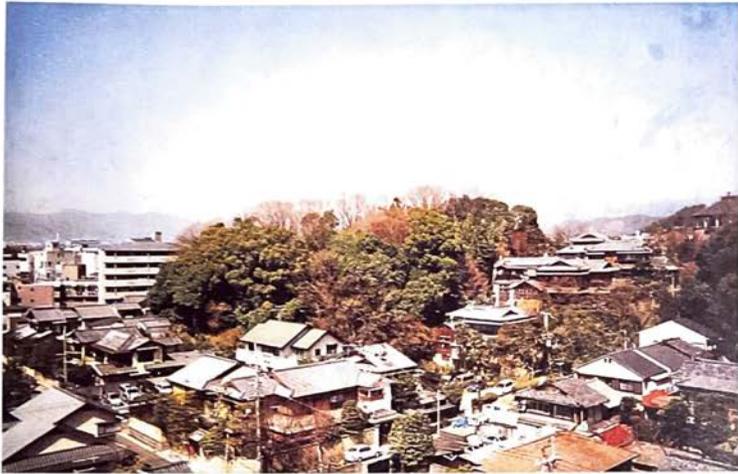


上 「ロマン・罗兰の友の会」(京都)第1回講演と音楽会(1948年6月12日、京都大学講堂)

写真講演者は片山敏彦、ほかにM.ロベエル、宮本正清、ツーサン、原知恵子(演奏—リュリ、ラモー、ヘンデル、ダカン・クーブラン、ベートーヴェン)

下 「ロマン・罗兰の友の会」創立記念・講演と音楽(1949年6月4日、東京神田共立講堂)

前列左より青木やよひ、清水丈男、宮本正清、植野豊子、片山敏彦、園田高弘、矢代秋雄、矢田俊隆婦人。後列左より高橋正衛、2人おいて新村猛、1人おいて佐々木斐夫、蛭原徳夫、1人おいて矢田俊隆、北沢方邦、守田正義、小尾俊人。



銀閣寺前町内マンション屋上から



白川対岸から